
氷の願望

中宮寺 澪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

氷の願望

【Nコード】

N1275P

【作者名】

中宮寺 澪

【あらすじ】

少女には世界のすべてを知るすがあつた。けれど、少女は満たされてはいなかった。少女が渴望し、願ったこと――それは、美しいまでの恐怖。崇高なる恐怖を得るため、多くの人生を壊していく。

前篇

鴉の羽のような夜空に輝き瞬く星達を仰ぎ、遠くに霞む街の人工的な明かりをじっと見つめると、少女は静かに耳を澄ました。ゆっくりと目を閉じる。そこは奇妙なほどに静寂に包まれていた。虫の声、風の音、気配すらない、宇宙空間のような静けさ。そんな冷やりとした空気の匂いを嗅いで、少女は満足そうに微笑んだ。

「見つけた。」

少女の微かな笑みからは何も読み取れぬ。ただただ、静かに息をして、じっと絵画を鑑賞するかのようにそこに居た。外界からは、ただぼんやりと立っているようにしか見えないかもしれない。けれど今、少女の頭の中には、膨大な感情が波打っていた。

——悲しい悔しい嬉しい愛しい美しい寂しい怖い哀しいどうして怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖いどうして。

ピアノの前奏が高音を激しく奏で、ヴァイオリンが重なるとコントラバスが暴走しフルートが叫びだす。少女の脳内に響き渡る轟音は重なり、重なり、高音と低音が混ざり合うことなく自己主張を繰り返す。眩暈がするような脳内の叫びに、少女はじっと耐えていた。笑いながら、涙を流しながら、気丈にそこにただ立っていた。可笑しくてたまらなかった。自分自身が、この世界そのものが。

「ねえ、わたし、ようやく気づいたの。ようやく見つけたのよ。」

星空しか映っていないその虚ろな瞳で、少女は遠くを見るかのようにつつとりと微笑む。

「これが、恐怖。」

くるりくるりと回りながら、ただ少女はその場に立ち続ける。大きく広げた両腕はそれでも世界を知るにはあまりに小さすぎた。ひらりと舞い上がるスカートの裾が風を産み、少女の涙を乾かす。

「わかったの、気づいたの、だからほら、早く、」

途端、少女の顔が歪んだ。抑えきれぬ感情をすべて吐き出すかのように、そして少女は。その場に膝をつく。

「ああああああああああああ……！」

ざわり。木々が騒めくと。それを合図にしたかのように、世界に音が戻っていく。

虫は鳴き始め、風が芝生を揺らし、ようやく世界は正常を取り戻した。そして。

「……たすけて、」

少女は、壊れた。

「神様つていると思う？」

美しく磨かれた銀色のフォークをくるくると回しながら、水ノ江瑠音はそう尋ねた。彼女の視線の先にはにこやかに給仕をする青年。彼はことりと少女の前にスクランブルエッグとベーコンの乗った皿、かぼちゃのポタージュ、サラダをすっかり準備し終えると、いつもと変わらぬ口調でさらりとかわした。

「物理学的見解、哲学的見解、宗教学的見解、どの結論をお望みで？」

瑠音はふいと視線をそらし、トマトにかじりついた。

「このトマトくらい真っ赤で残虐的な貴方の見解をお望みよ。」

青年——天泉響夜はくすりと笑って紅茶を継いだ。

屋敷内はひんやりと湿っていて、噓せ返る様な匂いで満ちていた。不快感しか呼ばぬような、空気の通わないみっちりとした室内はじくじくと音をたてて鼓動している。広すぎる食堂内はそれでも客人たちが転がっているせいでもどこか雑多で、小さな窓から僅かに差し込む太陽光がうすばんやりと部屋の様子をさらに不気味にしていた。古いわけでもなく、埃っぽいわけでもないが、それでもどこかオカルトめいた雰囲気支配されているのは、部屋中に広がる独特の臭いのせいであるのだと瑠音は知っていた。大きな悪魔のオブジェも、割れた鏡も、巨大なシャンデリアも、血塗られた絵画も、すべて。少女にとっては、物体以外の何物でもなかった。無関心。無感動。

それらを収集するたび期待だけが膨らみ、結局何も得られぬとわかるとすぐに興味を失う。そのサイクルを繰り返すことが今の彼女の人生であり、徐々に期待も薄れていった。ただただ、ぼんやりと毎日を繰り返すことしかできぬ自分に焦りと怒りを感じながらも、それでも生きることしかできなかった。退屈だった。

大きな大理石のテーブルの端に少女が座っており、目の前には朝食が並んでいる。空間は異質だが、それでも朝の風景としては何ら変わり映えしない。空間が、異質でなければ。

「わたしはね、神様っていると思うの。だってわたしがいるんだもの、神様だっているに決まってる。」

瑠音は、フォークをくるりと一回転させると、左斜めに横たわる客人をじっと見つめた。

「ひどい臭い。捨てて頂戴。」

そして、首から上がない客人は、ずるりと椅子から崩れ落ちた。少女の表情には恐怖などない。ただただ、不快感のみ。

「結局、何も変わらなかったわね。」

天泉はなおもにこやかに給仕を続ける。甘いジャムの匂いにとつとりと瞳を輝かせてから、瑠音はため息をついた。

「檻に閉じ込められた哀れな加害者は？」

「夜中は喚き散らしてましたけど、どうやら疲れて憔悴しきっているようです。」

「そう、つまらない。」

スコーンにたっぷりと苺のジャムを乗せると、周囲を見渡してからかぶりついた。瞳を閉じて、昨夜の舞踏を思い出す。

その日、男は復讐心だけを抱えて屋敷にやってきた。ただ、舞台は用意すると。その舞台で踊ってくれさえすれば、その後の処理もすべてやるから問題ない。ただ、踊ってほしい。そういう手紙が投函されたのが一か月前。ただ半信半疑だった男の前に真っ黒な外車が現れると、いよいよ男の怒りだけを増幅させる情報だけを携えた青年はにこやかに屋敷に案内した。男が手にしていたのは一本の日本刀。彼の瞳には憎むべき人物の姿がなく、ただ怒りに身を任せた人間というのはどこか獣じみた荒々しさと無鉄砲さに毒されているものだ、と、天泉は密かに嗤った。

「お嬢様が、晩餐の準備をして御待ちでございます。」

天泉はにこりと微笑むと、男を食堂へと案内した。巨大な観音開きの扉は細かい装飾を施されており、黒々とした影に覆われて金の取っ手が蠢いているかの錯覚に陥る。どこまでも不気味で、異質。男は一瞬だけ躊躇したものの、待ったをかけるよりさきに軽やかな手つきで青年に扉を開かせてしまった。

大きなシャンデリアで彩られた室内は重ったるい真っ赤なビロードのカーテンで外界から遮断されており、大理石のテーブルには色とりどりの豪華な食事が待ち構えていた。男の真正面の上座に座るは漆黒の髪 of 少女。そして、

「いやああああああああああ……！」

少女の横には、怯えた表情の、女。

叫び声を聞くと、男は弾かれたように駆け出した。遠くて扉が閉まる深い音を聞きながら、男はただ一直線に女へと走る。硬直した女は眼を見開き、わなわなと唇を震わせていた。

何も考えず、何も思わず、男はぐちゅりと女へと日本刀を突き刺す。男はただそのまま、何も考えずに女の首筋に刃を向ける。先程の衝撃で気を失ったのか、白目を剥いてだらしなく口から舌をのぞかせている女を一瞥すると、何事もなかったかのように女の首を撥ねた。肩で息をしながら、だらりと弛緩した女だったものが椅子に崩れるのを見ると、漸く男は《恐怖》にかられる。じわりじわりと歪んでいく表情を見て一瞬だけ顔を上げると、ふいと視線をそらして、少女は静かに口を開いた。視界の片隅では、何も感じていないようなぼんやりとした表情の少女が、静かに真つ赤な唇を咀嚼していた。

じわりじわりと歪んでいく表情を見て一瞬だけ顔を上げると、ふいと視線をそらして、少女は静かに口を開いた。

「駄目ね。天泉、片づけて頂戴。」

首筋の衝撃の前に、男はただ、少女の真つ赤な唇を記憶した。

「確かにね、あの娘の表情は所謂《恐怖》だったと思うのよ。」

かぼちゃのポタージュをスプーンで掬いながら、瑠音は相変わらずの無表情で呟いた。

「あの男の最後の表情はどっちかというところ《後悔》に近かったけど、でも、彼らは一様に何かに恐怖していた。でも、やっぱりそれがなんだかわからない。」

テーブルにぶちまけられた血液はそのままに、赤黒く変色して乾きかけたそれは少女の表情とはひどく不釣り合いだった。

「殺人現場って、怖いものだと思ってた。」

退屈そうに朝食を取り続ける少女に微笑むと、青年は静かに紅茶にミルクを落とす。

「駄目でしたか。」

「駄目だった。ねえ、もしよ、もし神様がいるのだったら、きっとあの哀れな男は救われたのよ。わたしなんかのために殺人を犯す必要などなかった。可哀想に。・・・矛盾してる？」

ふいと見上げた瑠音にやさしく微笑むと、天泉は静かに首を振った。

「お嬢様は優しいだけでしょ。貴方も苦しんでおられるのですから、気に病む必要などありませんよ。」

そつとスプーンでカップをかき混ぜると、少女はふうと息を吐く。

「わたしは、知りたいだけなのに。」

ぼつりと呟かれた言葉に、青年は苦笑した。

「ええ、わかっています。」

「《恐怖》は持続しない。永遠の幸福がないように、永遠の《恐怖》もない。それはわかったわ。」

こくりと喉をならしてミルクティーを飲むと、変わらぬ表情で瑠音は語る。

「一瞬の輝きなの。《恐怖》が最高潮に達した瞬間はひどく短い。どどくと脈打つ心臓の音を手取るように感じられるのも一瞬だけでしょう。それじゃあわたしが知りたいことを観察することもできない。《恐怖》を持続させる必要がある。ねえ、」

カップをそつと置くと、瑠音は青年を見上げる。

「貴方は、何に《恐怖》するの？」

何度となく繰り返された問い。天泉は、いつもと変わらぬ返事をする。

「俺は…前にも言いましたけど、貴方の居ない世界に恐怖しています。」

諦めたように椅子に体を沈めると、瑠音は哀しそうに笑う。

「貴方はいつもそれだわ。父に無理矢理わたしの相手をさせられているだけなのに、どうしてそう思えるの？」

「俺にだってわかりません。ただ、貴方を救いたいだけです。貴方の平穩のためならば、俺はきつと何だってする。今の恐怖は、その目的を失うことです。そうなってしまつてはきつと俺も生きられない。恐怖はね、お嬢様。理屈ではないんです。本能なんですよ。」

青年はただまっすぐに少女を見つめる。

「わたしにはその本能がないのかもしれない。きつと、わたしは一生《恐怖》という快楽を得ることはできないのかもしれない。脈打つ心臓、脳内に響き渡る危険信号、思わず喉から絞りでる叫び声。その最高の悦楽を感じられずに、ずっとただ時を貪るのかもしれない。」

青年は、白い手袋を外し、そつと少女の髪を梳いた。

「それでも、可能性に賭けるのでしょうか。」

「かけるわ。」

今の状況がおかしいことくらい、青年にはわかっていた。ただ、少女を失う悲しみほどに、少女という存在に恐怖していた。畏怖。圧倒的な恐怖は支配力となり、それはいつしか深い愛情へと形を変える。青年は少女にただ、この愛情に気づいてほしかった。恐怖の末の、甘い夢へとたどり着いてほしかった。そのことが今の天泉の生きる理由であり、幸せだった。少女の我儘がすべて愛おしく、そして可愛らしいと思った。そう思う時点で、もはや自分もおかしくなったのだと気づいていた。けれど、馬鹿げているとは思わなかつ

た。

「わたしは、最後の大勝負にでる。」

どこか決心したような瞳で、瑠音は静かにそう言った。

「もう、退屈な日々を無駄にするのはやめにするの。」

そして少女は、ポケットから小さなメモ用紙を取り出す。

「ここに名前のある人物を招待して頂戴。わたしは彼らから、最高の《恐怖》を絞りとってみせる。必ず、全員集めるのよ。」

無感情にそう言った少女を見、そしてそつとメモ用紙を開いた。

「……………了解しました。」

一瞬戸惑ったように、青年の瞳が揺れる。そんな彼を見て見ぬふりをして、少女は静かに、残りの朝食に手をつけはじめた。

真っ黒く塗りつぶされたかのような屋敷は完全に静まりかえっていた。物音ひとつせず、ただじつと終わりの時を待ち続ける、まるで棺桶のようだった。オカルトじみた外見に違わず、血の匂いに満ち満ちた食堂。そして、食堂から大広間に続く長い廊下には少女が収集した首かざりが。あちらこちらに不気味なオブジェが立ち並び、薄気味悪く鳴く小動物達の檻ががしやりと音をたてる。少女の寝室

でさえも頭蓋骨が列を成していたりホルマリン漬けが並んでいたりするものの、それでもまったく動じる様子もなく瑠音は静かにベッドに身を投げた。天井に大きく書かれた銀色に光る魔方陣を睨みつけ、どこまでもゴシックに彩られた己の部屋を見渡す。そして、小さくつぶやくのだ。

「ちつとも怖くないじゃないの。」

——つそつき。

不気味なものたちに囲まれて、そして少女は静かに瞳を閉じた。

*

舌先で蕩けるダークチェリーの外国産の飴玉はどこか苦いほどの甘さを閉じ込めており、口内で粘膜を犯す砂糖の塊に一条はじつとりと冷や汗が首筋を濡らすのを感じた。脳内を流れる重低音は心拍数をあげ、奇妙なリズムに体が浮遊していく。じわりじわりと侵食していくその《何か》に、ただぼんやりと思考が揺れるに任せていた。今を思考せず、過去を誘拐して爆弾を仕掛けるような真似はしない。ただ鋭い矛先を鮮やかな色で染め上げることだけに集中することで、彼は過去と決別し、そして未来を蹂躪していた。快感だった。

視線を泳がせ、ふと窓の外を見る。そこには、ただただ沈みゆくだけの巨大な断末魔がゆらゆらと世界を食む情景があるだけだった。他の世界はまるで窓枠という異質物に切り取られたかのように一条の視界から欠落し、すべての音は遮断されていた。脳内を暴れる《何か》以外は、蓮にとつては無意味かつ無駄であり、その存在を五感が感じる度に無駄を排除すべきだと《何か》が喚く。虚ろな漆黒の瞳は僅かに濡れ、奇妙に歪んだ唇から覗いた舌先は、驚くほどに赤かった。

そつと硝子に指を這わせる。無機質な硬度、冷笑のような温度、光の加減で瞬間的にちらと見えた己の姿に蓮は眉を潜めると、窓の向こう側の世界をじつと睨みつけた。赤い世界が、最期のあがきを見せていた。吸い込まれていくような雲の流れにのつて、黒い生き物が悠々と空を翔け、果てのない天井は彼を嘲笑うかのように窓枠によつて切り取られていた。そこで、そうして彼の世界は移り行く。一条の望むに關係せず、彼自身を誰も何も省みることなく、世界は勝手に過ぎ去っていく。そして今、男は自らの手で己の世界を破壊した。もはやただの鉄となった窓枠など、それ以上の意味は持たない。男の世界を構築していた飴細工は崩壊し、そして彼の世界だった場所に大量の蜜が流れこんできた。べとつく甘さ、ひんやりと冷たいようで柔らかい、そんな世界が彼の脳を犯す。全身の筋肉が喜びに震え、見開かれた瞳には突き刺さるような視線が攻撃を仕掛ける。そして世界は、一条蓮の敵になった。

ただ、憎かった。純粹に憎しみしかなかった。ここまで人は人を憎めるのかと思うほどに、ただ真っ直ぐに憎かった。

高倉ほのかは一条の婚約者であるという噂が流れたのは何時ごろだったか、それはあるひどく暑い日の夕方のことだった。屋上で煙

草をくゆらせていた一条のもとに同僚の男が現れ、茶化したのだ。高倉ほのかとの拳式はいつか、と。一条はわけがわからなかった。高倉が同じ部署の女であるということくらいは知っていたが、正直なところ顔と名前が一致してすらいない。そもそも、彼には心に決めた女性がいたのだ。彼女に知られたらまずいと、一条はただその噂を否定し続け、そして発端を作った奴に一言文句を言おうと思いついた。発端が高倉ほのか自身だと知ったのは、もう涼しくなりかけているハロウインの一週間前のこと。

——ねえ、一条くん、

——わたしね、

瞬間、男の中で何かが爆発した。噂が原因で彼の思い人と疎遠になりかけていることも相まって、彼は妙な噂を流した彼女が許せなかった。たとえ、それが彼女の嫉妬心から来る愛情が原因なのだとしても。彼は、彼女と彼女さえいればどうでもよかった。自分のことが好きなのだと言ってくる高倉も、他の女にも、まったく言っていないほど興味がわかなかったのだ。

——君はすべてを壊そうとしたんだ。

己からこうまでも低い声が出るなど、一条は知らなかった。女の唇が言葉を産むたび、体中を流れる血液が沸騰するような錯覚に陥る。なぜうまくいかないのか、なぜこんな女に好かれてしまったのか、現状と己を呪った。

——火のないところに煙は立たないのよ、

そう言つて去つて行つた彼女の後姿がしっかりと脳内に焼き付いていた。すべて高倉のせいだと、頭の中で声が反響する。屋上にさりと流れる風が前髪を揺らし、高倉の姿が視界をちらちらと揺らす。一条は、ただ静かに呟いた。

——頼むから、もう僕の前に現れないでくれ。

けらけらと笑う高倉を睨みつけると、煙草を踏み消して、足早に屋上を出た。怖かった（、、、）。高倉を今にも突き落とそうとした自分自身が、高倉の虚ろな笑みが、蒼すぎる空が。すべてが混ざり合い、爆ぜる。ショートしたようにぎりぎりと言を立てる脳の回路が一条をさらに追い込むのだ。しかし、そんな一条をあざ笑うかのように、事態はますます悪化していった。

「は…？」

いつも通りの休日だった。愛おしい彼女と、ただぼんやりと喫茶店で時間をつぶすだけの一日。なんでもない話をして、夕食はどこへいこうかなどと予定を立てつつ、ただただ幸せな時を謳歌するはずだった。それが崩れたのは、いつもと同じ珈琲を頼んでソファタイプの大きな椅子に二人で腰掛けた瞬間だった。彼女の口から、この言葉が漏れたのだ。

——そろそろ、私耐えられない。

どこことなく元気がないとは思っていた。ただ、それすらをも抱擁し、彼女の悩みを聞いて二人で困難を乗り越えていけばよいと、一条はそう考えていた。むしろ彼の口から切り出すはずだったのだ。

それが、深刻そうな、けれどどこかすつきりとした表情でそう呟かれてしまうと、一条はただじっと話を聞くことしかできない。

「ずっと黙ってた。私、きつと二人でなんとかできると思ったのよ。でも、もう、」

——限界なの。

彼女の言葉がぐるりぐるりと頭をめぐる。アイスコーヒーに落としたミルクのように輪を描きながら沈殿していく。彼女の言葉はひどく重く、一条の心の奥にぐさりと突き刺さった。

「脅迫電話も、貴方からの多すぎる手紙も、もうたくさん。そこまです無理に私を愛さなくてもいいのよ。彼女がいるのならば、私なんて放っておいて。無駄なまでの愛の言葉は逆に嘘にしか見えない。もう、私はあなたを信用できない。」

あまりにもだった。彼女の言葉に若干不可解なことも混じっていたが、それよりも。自分自身の不甲斐なさに、そして高倉ほのかの執念深さに、ただただ一条は驚愕していた。そしてやっとのことで絞り出た言葉は、あまりにも情けないもので。

「待ってくれ、僕は、僕は君に手紙なんて、」

「もういいの。」

真っ直ぐ前を向いて、しっかりとした瞳で、彼女は静かに言葉を紡ぐ。誰かの入る隙などない、ぎゅうぎゅう詰めにされた彼女の心

はあまりに堅い。

「私はもう大丈夫。一人で生きていくわ。もう遅いの。…ごめんなさい。」

何かに追われるように、一条の顔を見ることなく、彼女は静かに立ち上がった。そして明るい声で、笑う。

「楽しかったわ。少なくとも、さっきまでの私は幸せだった。ありがとう。」

ヒールの音が遠ざかるのを聞きながら、一条は。

——高倉、ほのか。

彼女ではない、別の女性で頭をいっぱいにしていた。憎悪。憎悪。憎悪。すべてを壊した女への憎しみ。これでもかというほどに彼は憎しみと、そしてわずかな悲しみしかなかった。彼には、寂しげに去っていく女性のことよりもまず、高倉をどうにかせねばと思った。高倉を消してしまっから、後のことは考えればいい。彼女を救うのはそれからだ。まずは…

——高倉を、消さなければ。

その時から、彼は壊れ始めた。

「一条くん！」

高倉のマンションの前につくと、やたら短いスカートをはいて、長い髪をおろした彼女が現れた。シャワーでも浴びたのか、わずかな熱気とシャンプーの匂いが微かに一条の鼻孔をくすぐる。

「来てくれてありがとう、こっちよ。」

腕をひかれ、マンションに向かって歩き出す。一条はただ、静かに嗤っていた。

——もしもし、高倉？僕だけど。

——『え、一条くん？なんで、』

——君に話したいことがあるんだ。よかつたら、今から会えないかな？

——『え、』

——どうしても、今すぐ君に会いたいんだ。なんなら家の前までいくよ。

すべてを隠した、甘い声色で。家の前まではやりすぎだったかと心中で反省しつつ、一条はあくまで爽やかに、笑う。

——『…わかったわ。家で仕事してたの。よかつたら来て。住所は、』

ああ、人間とはあまりに弱い。弱すぎる精神に漬け込むことほど、簡単なことはないのだ。一条は、礼を言ってから、すぐにタクシーに飛び乗った。

簡素なマンションだった。弟と二人暮らしたと聞いてはいたものの、弟は寮に入っていて冬休みまでは帰ってこないのと言う。適当に受け流しつつ、リビングに通された。アイボリーを基調とした柔らかな家具たちは彼女の趣味ではないのかもしれない。ところどころに置かれた可愛い置きものたちが部屋を彩ってはいるものの、どこかこの部屋にはミスマツチだった。

「昔は母と三人で暮らしてたのよ。でも、半年前に病気で亡くしてからは二人つきり。寂しくはないけど、弟が心配だね。」

ふと柔らかく笑った高倉に、一条は一瞬だけ戸惑いを見せる。けれど、薄手のキャミソールを着た彼女を目にすると、その戸惑いはすぐに仕舞いこまれた。彼女は、自分達の幸せを狂わせたのだ。きちんと問い詰めなければ。一条は静かに笑いながら、アイスコーヒーを受け取る。ブラックだった。

「話ってなに？」

ソファに並んで腰をかけると、甘えたように高倉はそう尋ねる。

「僕の彼女に脅迫電話したのは君だね？ああ、別に怒っているわけじゃないさ。ただ事実を確認したいだけだ。だって、僕は君に感

謝しているんだからね。」

優しい声を作って、彼女の頭をなでる。一瞬だけこわばった体も、そして徐々に緊張がほぐれ…高倉は、一条にすり寄る。

「そう、私よ…ごめんなさい、だって私、彼女がうらやましくて。」

「何故？」

「私、どうしても一条くんが諦められないもの。幸せそうな彼女が羨ましかっただけなの。私は彼女になりたかった。貴方に愛されたかっただけなのよ。」

僅かに涙をためて、こちらを見上げる高倉に、一条は笑ってこう囁いた。

「大丈夫、僕も漸く、気づいたんだ。」

一条は嗤っていた。太陽のような笑顔で、最大級の笑みを作っていた。高倉はくらりと酔っていくのを感じる。そっと、頭を彼の肩にあずけた。

「僕もね、君のことを、」

高倉は信じていた。これで、自分は幸せになれるのだと。長かった。脅迫めいた電話を鳴らし続け、彼女が気味悪がるほどに愛の言葉を一条のふりをして送り続け、そしてここまでこじつけた。あまりに長い期間、一条を想い続けた自分が勝ったのだと、そう思った。

けれど。

「殺したいぐらい、君だけを想ってたんだ。」

一条の言葉を理解するよりさきに、高倉の頭に衝撃が走る。ソファから落とされ、床に頭を打つたのだと気づく前にはすでに己の首筋に一条の指が絡みついていた。

「っ…い、ちじょう、くん、やめ…っ…ああ…！」

「彼女とデートしているときも、普段会社にいるときも、毎日毎日君のことしか考えてなかったんだよ僕は！君のその厭らしい笑みが歪む姿を想像してはどこへも逃がせない怒りでいっぱいだった！嬉しいだろう？今君はあんなに願ってた僕に触れているんだ！幸せだろうさ！」

苦しい、痛い、助けて、苦しい、苦しい、いやだ、いやだ、いやだ、怖い。

朦朧とする頭の中で、高倉は最後の力を振り絞って一条の指先に深く深く爪を立てた。うめき声がして、一瞬彼の力が弱まると。高倉は、裸足のまま駆け出した。振りかえられなかった。怖かった。恐怖しかなかった。彼の、首を絞めている最中の笑顔が怖かった。叫びだすほどの後悔と恐怖が高倉を襲う。

「ほんとに…君は我儘だよな。」

爪を立てられた手の甲をちろりと舐め、高倉は怒りに満ちた瞳でドアを見つめ続けた。逃がしようのない怒りは収まらず、ますます脳は沸騰するばかり。逃げ出した高倉を追うことはせず、一条は静かに部屋を見渡した。

「さて、どうしようかな。」

壊れてしまった一条は、ゆらりと立ち上がると。

部屋中に、盗聴器を仕掛けはじめた。

その日から、高倉にとっては恐怖の日々が始まった。毎日のように鳴る電話。毎日に十通を超える手紙に百通を超えるメール。隠し撮りした写真や動画が送られ、精神を蝕まれていった。けれど、自分自身がかつて彼女にしたことを繰り返し返されているだけだと気づくと、警察にいくことも誰かに相談することもできなかった。弟への仕送りのために仕事はやめられなかった。食事も喉を通らず、体重も落ち、死人のような風体になり果てた高倉を見て、一条は爽やかに嗤うのだ。

「高倉、大丈夫か？後は僕がやっておくから、君はもう先に帰っていいよ。」

刃のような言葉に、高倉の精神はズタズタに切り裂かれていく。そんな彼女を救ったのは、一通の手紙だった。

『貴方の苦しみはわかっています。一条蓮からの被害、警察に言えないわけもすべて知っています。貴方を助けましょう。わが社に協力していただけるのであれば、貴方を救いましょう。』

怪しすぎる文面を、彼女が信じてしまったのは。それほどまでに、彼女が弱っていたからであろう。これで救われる。命があれば、もうなんでもいい。そんな、限界地点まで彼女は追い込まれていた。

そして数日後。真っ黒な外車が、彼女のマンションを訪れる。

——主が貴方様をお待ちです。

優しい笑みを浮かべた好青年に連れられ、そして彼女は死へと向かう。恐怖の終着点へと、すべてを終わらせるために、ただ彼女は、長い間暮らしたマンションに静かに別れをつげたのだった。

冷たい金属に体温が奪われていくのを感じる。一条は、すべてを否定した。過去をすべて忘れ、これからどうするかを決めようと思

った。すっかり暗くなった世界に散らばる都会の明かりをぼんやりと見つめながら、たった一人の愛した女のことだけを考え続けた。たくさん傷つけ、苦しめた。せめて彼女にもう一度会って、今度はきちんと謝りたいと、そんな簡単に純粹すぎる思考へとゆるゆると身を任せる。

——ねえ、一条くん、

彼女の首を撥ねたときからずっと聞こえる、聞こえるはずのない声に脳を支配されながら。男は静かに呼吸をつづけた。視界をちらちらとよぎる彼女の笑みが、白い肌が、男をまぎれもない事実へと落とし込む。

——私には、やっぱり貴方が必要だわ。

繰り返される愛の言葉はすべて偽りだったのだと知りながらも、男は恐怖の境目にいた。——殺したはずだ。

確かに首を撥ねたはずなのに、何故高倉がここに横たわっているのだ。何故血を流しながら（、、、）嗤っているのだ。

——一条くん、

男は撥ねた。ダークチェリー味の飴玉を転がしながら、何度も何

度も何度も何度も憎き女の首を撥ね続けた。

——一条くん、一条くん、一条くん、一条くん、

壊れた機械人形のように己の名前を呼び続ける高倉は、何度切り離されても嗤い続ける。

「あああああああああ……！」

そして、一条は恐怖した。純粹なる恐怖を味わいながら、ただただ、女の首を撥ね続けた。

ゆるゆると過ぎていく時間の中で、一条は様々な感情が渦巻いて行くのを感じていた。恐怖、後悔、愛情。色とりどりの絵具を混ぜると黒く変色するように、やがて男の心は真っ黒く染まっていく。壊れた瞳で死んだはずの女の幻覚を見続けると、そして男は気付くのだ。

——ああ、そうか。

高倉はなおも嗤い続ける。

——これが、僕への罰なのか。

悪夢にうなされ続けることが、一人の人間を殺した罰なのだと。感情に支配された指先が犯した罪は、一生苦しむことを必要としているのだと。

——ならば、今度は僕は。

何度となく切りつけた女の瞳を覗き込む。そこには、ただ愛情しかない。

——君を、愛することにしよう。

優しく笑って髪を梳く。

そこには、ただ。

恐怖の果てへと逝ってしまった、たった一人の男の姿しかなかった。

*

空に向かつて毒を吐き出した。紫色に歪んだ天井は徐々に青さを増し、なすすべもない白かった雲たちは鮮やかに染められていく。夏だというのに突如として気温が下がり、寒々しく虚しい風が胸元を掠める。視界いっぱい広がった広すぎる空はどこまでもせまりくるかのようで、それでいて揺らぐことのない空気はじつと《幻想的な夕方》を構築していた。芸術とも言えるほどの虚構に似た丸い天井はあくまでも自然本来の形であると言ってよく、その美しすぎる幻に涼は嫉妬した。

屋上から得られる視覚情報というのは種類が豊富だ。自然そのものもあれば人工的に作られたものも同時に観察できる。両者が溶け合う瞬間に立ち会えることは涼にとってはこの上ない幸福であり、その時はじめて彼は自由になれた。そして、今日も心の中で彼は叫ぶ。

《逃げたい、逃げたい、逃げたい、》

世界からの逃避、己からの逃亡。すべての空に嘘をついてすべてを捨ててしまいたいと彼は願いつける。眼下に広がる黒々とした都会にちりばめられた無数の光の輝きがちらちらと平衡感覚を狂わせ、徐々に視界が揺れていく。頭が真っ白になるほどの巨大な怒りや悲しみが、果てのない地獄に涼を連れ込もうと踊り狂う。涼にしか見えない世界、涼だけの世界。どこまでも無秩序で、けれどどこまで

も自然体な世界は、他人とまったくおなじはずであるのに何故か涼にとつては違く見えてしまう。認識の差。過去のトラウマによる過剰反応。原因は貞かではないが、それでも彼は苦しんで苦しんでもがきながら血を流す。

《あああああああああ》

頭の中で反響する声が、ぞくりと涼を襲った。ぷつりと音をたて、そこで彼の意識はなくなる。

目が覚めると、保健室の中だった。どうやら無断で屋上に上ったのが寮長にばれたらしい。目の前で無表情にため息をついた若い女医は静かに部屋に帰りなさいと言うと、そつと涼に冷えびたを渡した。

「高倉くん、もう屋上には上っちゃだめよ。貴方は今とっても疲れてるんだから。」

女医の言葉を後ろに聞きながら、涼は黙って部屋を出た。薄暗い廊下をひたひたと歩き、自分の部屋へと戻る。

高校一年の春先、母を亡くしてから。涼には、親類と呼べる存在は姉だけになってしまった。姉は涼の学費と生活費のため、必死に

働いていた。高校をやめて一緒に働くと言った涼に、姉のほのかはさらりと笑ってこう言ったのだ。

——馬鹿ね、あんたせつかく頑張つて受験したんだから、ちゃんと勉強しなさい。私なら大丈夫。これでも結構重要な役職なんだからねっ！

あどけなさの残る無邪気な笑顔を思い出し、涼はそつと唇を噛んだ。

そんな姉が消息を絶ってから、半年以上がたった。

姉は、会社をやめていた。しばらく留守にすると隣人には伝えていたらしい。新聞も取るのをやめ、一切の面倒事をすべて絶ったように見えた。家に帰るときちゃんと外出したようで小綺麗にされており、このことが涼をさらに不安にさせる。変わったことといえば、留守番電話や通話の履歴がすべて消去されていたくらいである。漠然とした恐怖の中で、不安定になった涼は途方に暮れていた。

部活をやめ、教師に事情を説明し、アルバイトを許可してもらった。コンビニエンスストアと喫茶店を掛け持ちながらただ自分の小遣いくらいは稼がねばと思った。通帳は姉の部屋にあったので、当分は困らないと思われたが、正直なところ進学できるかどうかはわ

からなかった。

もうすぐ夏休みになる。あと半年、どうにかしてお金をためなければと思った。少年は、姉のことを考えまいとしていた。いなくなつて一ヶ月で不安定だった彼の体は高熱におかされ、二ヶ月で大幅に体重が落ちた。三ヶ月で何度か自殺未遂を繰り返し、四ヶ月で笑えなくなった。五ヶ月でふっきれたようにすべてが元通りになったが、六ヶ月目で、とうとう涼の精神は崩壊した。脳に流れる疑問、疑心。すべてを敵だと見なすことに意味などないと知っていたからこそ、涼はただじっと、考えるようになった。

——姉さん、

そつと唇だけで姉を呼ぶ。僅かな隙間から漏れた空気がひゅうと音をたて、少年はベッドに顔を埋めた。

現実的に生きようとした。嘆いてもはじまらないと、ただただ真っ直ぐに前だけを向こうと努力した。友人達の心配する声に笑つて大丈夫と答え、その半面で一人の時間を殺すことが堪らなく嫌だった。何も感じだくなかった。そんなことをぼんやりと考える夜が怖かった。姉のいない現実には直面する瞬間が怖かった。

そうして開け放った窓からの風にゆるゆると思考回路を遡っていると、軽くノックの音がした。今は深夜だ。いったい何だというのだ。

「……はい？」

そつとドアを開けると。

そこには、老女が立っていた。

薄手の水色の着物を着て、きちんとした身なりの、気品のある老女だった。見たところ80歳くらいだと思われたが、彼にこんな知り合いなどいない。汗で張り付いたシャツが一気にひんやりとする。変だと思った。彼女は誰なのだ、こんな時間に何をしにきたのだ、

「高倉涼君ですね。」

凜とした、強い意志を感じさせる声だった。真つ暗な廊下にじつと姿勢よく立っている姿はどこか神々しく、ぼんやりと光っているようにも見えた。

「そうです、けど。…あの、」

「私は穂波麗子と申します。」

視線をそらすことなくそう告げると、麗子はすらりと部屋に入ってきた。どうすることもできず、涼は戸惑いながら扉を閉めた。

麗子は室内の小さな椅子にさっさと腰かけていた。表情は変わらない。哀れなこの部屋の住人は、仕方なくベッドに座った。

「あの、あなたは、」

「私はあなたに話があつてきたのです。」

探るように話す涼とは反対に、麗子はまるで舞台台詞のようにただ淡々と言葉を繋いだ。なんの感情も見えない、形容するとすればそれはロボットのようなものだった。

「お姉さんのことと、今後のことです。」

ひやりとした。

つつ、と背中に汗が伝う。心拍数が上がり、涼はやめてくれと耳を塞ぎたい衝動に駆られる。嫌な予感がした。心のどこかではわかってのことだったが、それでも突然現れた謎の老女から姉のことを聞かされるなどあまりに異質だ。不安で押し潰されそうになりながら、涼はごくりと唾を飲み込む。

「私はすべてを知っていますが、私に悪意はありませんので。あくまで私はメッセンジャーであり、ただの情報伝達のためのメディアにすぎませんから。」

嫌な話し方だと思った。こちらに隙を見せない、すべて決められたことのような無機質で無感情な声色。じつとりと、背筋が汗ばんでいく。

「姉さんのこと、知ってるんですね、」

慎重に言葉を選ぶ。自分自身で噛み締めるように、ゆっくりと言葉を編んでいく。

「知っています。貴女のお姉さんは、結婚しようとしていましたね？」

涼の脳裏に、一年前の夏が蘇った。

「涼、私ね、結婚しようと思うの。」

夕食のメニューを話すように、ほのかはさりとそう告げた。

冷房をつけるのが勿体なく感じられ、二人でアイステイーを飲みながら開け放った窓から入ってくる風に髪を遊ばせ、涼んでいた。涼は宿題をやっていた手をとめ、パソコンで仕事をしている姉を見つめた。

「結婚って…姉さん彼氏いたっけ…？」

ことはそう大きくないのだろうと判断した涼は、同じような調子で返事を返す。案の定、ほのかは視線をパソコンから離さない。

「彼氏、ああ…そうね、うん。ほら、結婚したら、私も涼も幸せじゃない？」

「姉さん、」

それは答になってないよ、と。そう言おうとした涼に向かって、ほのかはにっこりと笑った。

「何も心配しなくていいのよ。全部、姉さんに任せて。結婚したらわたしだけ苗字変わるだろうけど、今よりずっと楽に暮らせるようになるし、涼も大学に行けるようになるわ。」

話が噛み合っていないことに疑問を感じながらも、きつとふざけて驚かせたかっただけなのだろうと、その場では気にもとめていなかった。

それが。

「姉さんは、結婚したんですか…?」

涼はじつと麗子を見つめる。老女は、相変わらず表情を変えぬまま首を振った。

「お姉さんは結婚しようとしたが、残念ながら失敗しました。」

おかしい話だ。結婚に失敗というのは日本語としてもおかしいではないか。

訝しげに表情を歪めると、麗子はするすると語りだした。

「お姉さんは貴方のために結婚しようとしたのです。少なからず想いを寄せていた男性がいたようですが、もうほのかさんはあまり待っていられなかった。段階を踏まずに、一気に結婚へと持ち込むた

め…あらゆる手段を尽くしたようです。」

知らなかった。

少年は、どくりと心臓が跳ねるのを感じる。体温が上昇していく。汗が吹き出る。

「しかしその男性にはすでに想い人がいました。複雑に絡み合った想いが…やがて終局を向かえるまで、あまり時間はかかりませんでした。」

涼は己の勘のよさを呪った。気づきたくなかった。不安定なままでもいい、希望を捨てたくなかった。しかし、老女は残酷にも言葉を浴びせる。

「お姉さん、高倉ほのかさんは、」

——姉さん、

「彼女が結婚しようとした相手、一条蓮という男に殺されました。」

「そうそう、私、結婚したら一条ほのかになるのよ。なんだか雅な名前じゃない？」

そう言つて電話越しに笑つた声が、涼が聞いた姉の最後の言葉だった。気が早いよといつて笑い返して、そしてお互い笑顔で電話を切つたのだ。姉の消息が絶つてから、一条という男を探そうとした。けれど。

——一条？そのような者は我社にはおりませんが。

涼にとって不運だったのは、すでに一条は会社をやめていたことと、電話に出た受付嬢が入社したてで名簿しか確認しなかったということだ。八方塞がりになった少年は、それから半年たつて、そして再び一条という名を耳にする。

時がとまればいいと思った。どこかで覚悟していたのかもしれない。涙は出なかった。ただじつと、床を見つめ続けた。

「残念ですが一条は行方不明です。お姉さんの遺体も何処にあるかはわかりません。」

繰り返される老女の言葉をも、少年はさらりと聞き流していた。

「けれど、心配することはありません。私が貴方を助けましょう。」

ゆるゆると視線を上げる。死んだような笑みを浮かべて、老女は頷いた。

「私が貴方の生活を守りましょう。明日、銀行に行ってみなさい。これから必要となるお金はすべて振り込んでおきました。」

涼は思わず立ち上がった。今更ながら、涼は麗子が怖くなったのだ。

「っ貴女はいつたい誰なんですか！何故姉さんのことを知っていて、俺に構うんですか！」

当然の疑問だった。麗子は薄く笑う。

「私は、お姉さんと深い関係を持つ者、私は……」

「私は、貴方に責任を感じている。せめて貴方には、前向きに生きてほしい。っと、こんなところね。しっかり伝えさせるのよ。場合によっては盗聴してもいいわ。」

少女は、目の前で己の言葉をさらさらと書き取る青年に向かって悪戯っぽく笑った。

「了解しました。しかし…何故今回は俺じゃないんです？」

青年はメモを折り畳んでポケットにしまってから、不思議そうに尋ねた。少女はけけらと笑う。

「うたぐり深い人間には交換条件が一番手っ取り早いよ。彼女が無償で甘い蜜を吸うことを拒否するのであればこちらも彼女から利益を吸い取るのだと納得させればいい。案の定、彼女はしっかり働いてくれたわ。真夜中の訪問者って怖いんでしょう？白雪姫みたいに、青年よりも老女の方が怖いって本で読んだの。」

ぎりぎりと椅子を鳴らしながら、少女は笑う。

「きつと今回は上手いく。そんな気がするの。」

青年は、優しく少女の頭を撫でる。

「ええ、きつと。」

「深夜の訪問、失礼しました。私はこれで。もう二度と、会うこともないでしょう。」

麗子はそして、涼を見ることができると移動し、ドアに吸い込まれていった。少年は啞然としたまま、ただじっと、ドアの閉まる音を聞いていた。制する間もなかった。本当はもつといういろいろなことを聞きたかった。結局、彼女が何者なのかも、目的もわからなかった。けれど。

「……終わった。」

長かった半年、姉のことを考え続け、悩みつづける日々が、ようやく終わったのだ。姉は死んでしまった。もはや、考え続けることに意味などない。涼が心を動かす人など、存在していなかった。

「姉さん、」

少年のつぶやきは空気に溶かされ、もう二度と返事が返ってこないことを知ると。

「っ…姉さんっ…！姉さん姉さん姉さん姉さん姉さんっ！」

少年は、漸く涙を流した。

何故結婚しようとしたのだ。別に楽にならずとも、二人で生きていければそれで良かったのだ。大学へ行けなくとも、力を合わせて

生きていけば、必ずいつか報われると信じていたのだ。姉が、自分のために死ぬなど、絶対にあってはならないことだった。

「馬鹿だなあ姉さん…俺は今のままでも、十分だったのにさ。」

ゆっくりと立ち上がる。虚ろな瞳から、知性は感じられなかった。

少年はそして、ゆらゆらと部屋を出る。

夕方訪れたときよりも、遥かに温度が下がった屋上はひゅうひゅうと吹き付ける風でいっぱいだった。深く息を吸い込むと、いくらか冷静になった涼はぼんやりと夢想する。

老女の言うことを信じることなく、明確に姉の死を実感するまで希望を持ち続けるという選択肢もあった。そうしなかったのは、少年がとくに限界を超えてしまっていたからだろう。

——ごめん。

遠くで霞んでいる夜の明かりを見つめる。ちかちかと激しい原色のネオンは気持ちが悪くなるほどに背徳の匂いで満ちている。大人という存在に、涼は疑問を抱きはじめていた。じんと耳の奥で深い音がしている。侵食されそうなその音が心拍数であり、次第に

荒くなっていく呼吸が涼の脳を揺さぶる。空気に溶けだしたいと思った。なにもかもなくして、なにもかも忘れたと思った。

そして涼は、フェンスに手をかける。

傾いていく身体、片方の足がコンクリートを離れると。

突如、涼の中に膨大な感情が流れこんできた。

——怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い
 怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い……！！！！！！

一瞬にして血の気がひく。後悔だけが押し寄せる。そして涼は、ありつた力の力で目を閉じた。遠くで、屋上の扉が閉まる音を聞きながら。

「…!!!」

片腕に衝撃が走った。ちぎれるかと思うほどの痛みと、ふらふらと風にゆれる己の足。反射的に上をむくと、そこには己の腕を必死

で掴んでいる青年の姿があった。見たことのない男。真つ白なシャツが夜空に映える。雲から漏れた月の光に照らされて、逆光になった男の姿は影のように黒かった。

「今死んではいけないっ……！」

そう苦しそうに言って、男は涼をゆっくりと引き上げた。

深い呼吸をして、屋上に寝転がる。ひどく脱力した体は、何かを発することができなかった。

「今死ぬのは許されない。恐怖を感じているのにも関わらずそれを甘受するなんて愚かしいことだよ、少年。」

ため息をついて、男は優しく笑った。涼はじつと見上げる。ひどく穏やかで、それでいて悲しそうな顔をした青年に、涼はぽつりと礼を言った。聞いていたのかいないのか、そして青年はくるりと扉に向かって歩きだす。

「、貴方は、」

慌てて体を起こした涼をちらりと横目で見てから、青年は哀しそうに笑った。

「きっと、また会うことになるだろう。」

吹きつける風に一瞬目を閉じると。再び開けたとき、青年の姿はもうなかった。

翌日。涼は銀行に行った。想定以上の金額が振り込まれているのを目にし、少年は生きようと思った。そして、姉の姿を心の奥にしまい込んでからは、再び、軽やかに笑えるようになった。

「天泉さん！」

「あ、高倉くん！」

クラスの女子から好きだと言われ、涼も彼女を好きになろうとした。姉以外にも、心を許せる人に出会えれば、きっと生き続けられるだろうと思った。

駅前で優しく手をふるクラスメイト、もとい、恋人に向かって、涼は笑顔で駆け出した。

＊

「これでよかったのですね。」

真つ黒な外車の助手席に身を沈めると、穂波麗子は相変わらず感情のない声でそう言った。運転席に座る青年はにこりと笑いながらハンドルをきる。

「会話は聞かせてもらいましたが、あれで問題ありません。主もお喜びになるでしょう。」

方耳に入ったイヤホンをとんと叩きながら、青年は嬉しそうにそう言った。

「あの子は、とっても可哀想な子。けれど、立ち直る方法なんていくらでもあるわ。」

すつと目を細めながら、麗子はぎゅつと手を握り締めた。

返事をしようと口を開きかけた青年は、しかし突然表情を変える。

「穂波さん、申し訳ありませんが、もう少し待ってただけですか。」

早口にそう言うと、返事を聞かずに車を止め、青年は先ほどまでいたところへと駆け出していった。一人残された老女は、ゆっくり

と瞳を閉じる。

人は時とともに成長する。長い時が不幸なこと、いやなことから目を背けさせ、いつの日か思い出として経験という脳内の宝箱に仕舞われる。時にはダストボックスへと捨てられ、すべての記憶は風化していく。だから、人はこの巨大な集団の中で生きていけるのだ。他の動物よりも長い時間を他者とともに過ごせるのは、そういった記憶の整理が行われているからだ、麗子は何度となく繰り返した思考を再び繰り返す。

——そう、普通の人間ならば。

中でも衝撃的なことや、どうしようもなく幸せなことはたいいてい深く記憶に残る。所謂トラウマとは、そうしてダストボックスにすらおさまりきらないほどの哀しみであったりするわけだが、それでもやはり人間の脳は上手くできていて、トラウマもそれに関連する事柄に出会わなければ動きださないのだ。脳は偉大だ。そう、不完全な人間はそうして完全なふりをして、なにくわぬ顔で日々を謳歌している。

——二年と二週間と3日前にも、同じことを、

しかし、麗子は違った。

麗子は他の人間とは違って、完全なる意識体だった。

——あの子は、茜と同じクラスの…

彼女の脳は、記憶を整理しない。麗子には、脳のダストボックスがないのだ。彼女の記憶蓄積装置はただ回収するだけであり、乱雑に置かれた物事をすべて認識してしまう。たとえるならば回りっぱなしのビデオテープ。麗子には、忘れるという機能がない。生まれたその時からずっと回り続ける。聞こえてしまった陰口も空で言えるほど鮮明に記憶し、その場の匂いや空気、視界、音、あらゆる五感で得た情報もすべて、すべて覚えている。街を歩くたび膨大な情報量に気がおかしくなる。家に帰ると見慣れた世界に染み付いた記憶で目を背けたくなる。眠るたびに麗子の意志に反して記憶が洪水し、心が感情で裂けそうになる。

すべての情報を絶とうとし、あらゆるメディアから意識を外したけれど、神経質な脳は敏感に情報を得てくるんだ。いつそのこと五感すべてを失えればと何度願っただろうか。麗子はいつしか、時間に恐怖しながら、早く老いたいと思うようになった。自殺は計らなかった。もし失敗すれば、その恐怖で一生苦しむのだとわかっていた。ならば、己の脳が退化するのをただ待とう、と。すべてに対して無感情になろうと決めた。何の感情も持たずにただ時間を食い潰せば、ある程度心も余裕をもてるのだと気づいてから、麗子は自分以外だけでなく、自分に対する興味すらも失った。自分からアクションを起こすことと言えば生きるためだけにする行動だけであり、もはや彼女に意志はほとんど欠落していた。

——響夜君。

だからこそ、彼女はすべて知っていた。つい5日前、自分の前に現れた青年が、20年前のあの少年だと。

——20年前

麗子は田舎で一人暮らしをしていた。他者と接触することの少ないここで生活すれば、都会よりは情報が少ないからだった。買い物をするのも嫌で、食材や必要物資は生協等で宅配してもらっていた。家事をして、読書をする毎日。読書は文字の情報しかないので、視覚を休めるのに最適だった。麗子は読書を愛していた。

その日も例外ではなかった。いつも通り洗濯を終わらせ、アイスココアを飲みながら読書に耽っていた。ただ文字を追いつづける作業。代わり映えのない日常だと思っていた。しかし。

その日、異端な存在が麗子の前に現れる。

「ごめんください。」

開け放った窓の隙間から聞こえた小さな声に、麗子はゆっくりと本を置いて視線をそちらに向ける。

「あの、」

そこにいたのは、小さな少年だった。

柔らかな黒髪をさらさらと風に躍らせながら、必死で背をのばして窓の隙間をこんこんと叩いている。どうやら玄関で同じことをしても麗子が気づかず、痺れを切らしてここまで来たようだった。

立ち上がって窓を開けてやる。少年は汗を拭いながら、困ったようにぎこちなく挨拶をした。

「こ、こんにちは。」

麗子は挨拶を返し、今玄関を開けるからと言うと、少年も外から玄関へとかけて行った。

ぎりぎりと言をたてて扉を開くと、そこには少年と、二人の赤ん坊を乗せた双子用のベビーカーがいた。真っ白なタオルケットを二人できゅつと握りしめた赤ん坊は、すやすやと眠っている。

「暑かったでしょう。さあこっちへ、ココアは好き？」

深刻そうに俯いた少年を目にして、麗子は優しく笑って招き入れた。久しぶりの客人だった。己の異常に気づいてからは親戚とも疎

遠になって、麗子は孤独だったのだ。その言葉をきくと、少年は顔を上げ、少しだけ笑った。

すっかり眠ってしまっている赤ん坊を起こすこともないと、ベビーカーに寝かせたまま玄関に入れて扉をしめた。麗子は少年を連れてリビングに戻ると、ソファに座らせてアイスココアをグラスについで運ぶ。落ち着かないようにきよろきよろと周りを見回し、少年は部屋を観察しているようだった。

「どうぞ、」

「…ありがとうございます、」

受け取ると、少年はこくりと一口飲んでから、ゆっくりと息を吐き出した。

「とつぜんごめんなさい、きょうはおねがいがあってきました。」

じつと麗子の瞳を見つめて、しっかりとした口調で少年はそう言った。真正面に座り、麗子もその瞳を見つめ返した。

「ぼくはあまいずみきょうやです。あのあかちゃんはいもうとのあいとあかね。ふたごです。」

ゆっくりと話す少年に、麗子はうなずきながら話を聞いてやる。

「ぱとままは、じこでこのまえしんじやったんです。」

俯いてそういうと、少年はぼんやりとした瞳でココアを見つめた。

「しんせきとかは、いません。あつたことないし、でんわもじゅうしよもしらなくて、」

ぼろぼろと、ビー玉がこぼれるように少年は涙を流した。

「でも、ぼくはあいとあかねをまもらなきゃだめで、そしたらきのう、みずのえさんっていうおじさんがうちにきたんです。」

ココアを一口飲むと、少年はため息をついた。

「ぼくを、はたらかせてくれるっていいました。みずのえさんのうちでいっぱい働いて、ちゃんとおとなにしてあげるっていわれて、」

麗子はただじっと、話を聞きつつける。

「でもぼくにはもうとたちがいるから、っていったら、いもうとたちはおやしきにこられないから、ほなみっていうひとがすんでるいえに行つて、いもうとたちをあずかってもらいなさいっていわれたんです。あの、これ、てがみです。」

啞然とした麗子に、少年は慌ててポケットから手紙を取り出した。

『拝啓 穂波麗子様

貴殿のお噂、聞き及んでおります。この地にてご隠居されているだとか。つきましては、哀れな少年と赤ん坊を救ってくださいと思ひお願いする次第です。天泉響夜は私の友人の息子です。彼に関しては私がお預かりします。しかしうちにも娘がおりまして、三人預

かるのが難しいのです。そこで貴殿のお話を友人から聞き、よろしければしばらく預かって、育ててやってはくさいませんか。私は足が悪く、妻も病で入院しております。そちらに赴くことができません。文書にてお願いすることは大変失礼なこととは思いますが、何とぞご容赦くださいますよう。双子を引き取ってくださいるのであれば、切手と同封してありますのでこちらにお返事をくださればと思います。必要物資等の費用はすべてこちらで受け持ちますし、後日使いの者をそちらに赴かせますので。

どうぞ、よろしくお願い致します。
敬具 水ノ江右近』

手紙を読み終えた麗子は、じんわりとしたよくわからない感情が胸に広がっていくのを感じた。それが同情だと気づいたのは、不安そうにこちらを見つめる響夜の顔を見たときだった。

麗子には、彼等を疑うこともできた。そうしなかったのは、彼女がこの先のことに関心がなかったからだ。麗子は、その膨大な記憶力で若い時分に重要な役職につくことができ、それでもあらゆることに無頓着だったために貯金がたまる一方。引きこもってからあまりお金を使うこともなく、これで騙されて費用が貰えなくとも双子を育てることはできるという自信があった。つまり、これは水ノ江という男性を信用できるか否かでも、何故自分なのかということが問題なのでもない。ただ、孤独になってしまった彼等を温かく向かえられるかということなのだ。

沈黙に堪えられなくなった響夜が、おそろおそろ囁くように呟く。

「…あの、ほなみさん…?」

思考の海に身を投じていた麗子は、はっとしたように目を見開く。そして、優しく笑って、響夜の頭をやんわりと撫でた。

「大丈夫。おばさんが妹ちゃんたちを、大事に大事に育てるからね。」

泣きそうになっていた響夜は、ぱあっと明るくなる。

「ほんとに…!?!」

——私は自ら孤独を選んだけど、この子たちは…

「ええ、本当。安心して、水ノ江さんのところにいきなさい。」

——認識するより前に、孤独になってしまったのね。

「…っありがとう!」

麗子は、久しぶりに、

ひどく、穏やかな気分になった。

数日後、約束通り水ノ江氏の使いだという青年が現れ、細々とした書類を渡された。学費や必要物資としての費用も振り込まれていた。思っていたよりも恙無く事は進み、そうして緩やかに3人の生活がはじまった。大変だった。けれど、何時にも増して、麗子は満たされていた。

「茜、ちよつとこつちへきて、洗濯物を取り込んで頂戴、」

「おばあちゃん、茜ったら昼寝しちゃって起きてこないの。私がやるわ。」

「藍は試験前でしょう？いいわよ、」

「いーの。おばあちゃん腰悪くするでしょ？大丈夫だから座つてて」

二十年経つて、双子は信じられないほどいい娘へと成長していた。幸せだった。家族のことを聞かれると、麗子は隠すこともないと正直に話した。二人はしばらく悩んでいたようだったが、いつしか、

『おにいちゃんに会いたい。』

と願うようになっていた。そのことだけは、麗子にもどうしようもなかった。双子はそれもきちんと理解していた。だからこそ、目の前で口にすることはなかった。人並の幸せを手にして、麗子はそして恐怖するようになっていた。いつ、あの少年が成長してやって

くるか。今の幸せのバランスが崩れることに、恐怖を覚えるようになっていた。

そんな、あの少年がやってきたような、暑い日のこと。

「ごめんください。」

凜とした声が、小さな部屋にじわりと溶ける。双子が学校に行ってしまった、午後。

扉をあけると、そこには、成長して声も変わり、身長も伸びた――天泉響夜が立っていた。麗子を見てにこりと微笑むと、ただ。

――主がお待ちです。一緒にきてくださいますか？

と、そう言った。

踏み込んではいけないのだと、老女は悟った。こちらからは何も言うてはいけないと、ただ彼に従おうと、そう思った。黙って微笑むと、麗子は静かに真っ黒な外車に向かって歩きだす。どこかで、終わりを感じながら。

そして屋敷に通された麗子は、水ノ江瑠音という少女に対面する。礼を言われてから、恩返しをしたいと告げられた。双子も兄に会う時期だし、ちよつど良いからここに一緒に住むといいと言われ、麗子は少し考えさせてくれと返事を保留した。考えたかった。長い期間考え、それでも考え足りなかった。

「いいですよ、でしたらまた2週間後、お迎えに参りましょう。それまでに、どうか結論を。それから――」

年齢不詳の少女は、輝かんばかりの笑顔を振り撒いた。

「ひとつ、お願いがあるのですけど。」

途端、老女はこの少女が怖くなる。膨大な記憶が、膨大な知識と経験が、麗子に危険だと告げていた。そつと、響夜を盗み見ると。

――響夜君、

彼は、ひどく愛おしそうな笑みで少女を見つめていた。

そうして麗子は悟るのだ。彼はもう、この少女に侵食されたのだと。自らの妹達と年齢が近いこの少女に、深い愛情を抱いてしまったのだと。

「それでは、穂波麗子さん。5日の夜、再び天泉が迎えにいきます

ので。」

簡単なことだった。ただ言われたことを、高倉涼という少年に告げればいいのだと。すべての台詞を一読しただけで暗記するなど麗子にとってはたやすいことだった。結局、老いてもなお、彼女の記憶力が衰えることはなかったのだ。

「それでは穂波様、お送り致しましょう。」

響夜に促され、麗子はゆらりと席を立った。最後に見た少女の笑みに、嫌な予感を感じながら。

「お待ち致しました。」

青年が少しだけ息を上げて戻ってきた。すぐにエンジンをかけ、滑るように車が走り出す。

「不自然なドアの開閉音がしましてね。屋上へ向かったのだと推測したんです。案の定、彼は自殺を計った。…無事阻止できましたけど。」

他者への興味を失った麗子は、適当に相槌を打った。彼女にとっ

て、高倉涼のことはどうでもよかった。問題は、これからの自分と、双子のこと。

もう歳をとりすぎた自分が、これから先ずっと彼女達の面倒を見るなんてできるはずがない。ならばやはり、屋敷に住ませ、兄とともに生かすべきだという結論に達しかけていた。躊躇の原因は、あの少女。恐怖を凝縮させたような、そんな薄暗い雰囲気少女だった。笑みにもどこか影があり、それは幼い子供独特の残酷的な笑みに似ていた。ぞくりと、背筋が泡立つ。

「穂波さん、貴女は、恐怖を知っていますか。」

ふいに、青年が呟く。麗子はぼんやりと赤になった信号を見つめながら、

「現在、私は恐怖しています。」

と、答えた。青年はくすくすと笑う。

「貴女が恐怖している彼女は——恐怖を、知らないんですよ。」

青年の言っていることが理解できぬまま、穂波はゆっくりと目を閉じる。瞼の裏には、様々な情報が。

青年、少女、少年、少年の部屋の家具、今日の昼食を取った店のメニュー、双子、双子の洗濯物、車、ヘッドライト、信号、少女の屋敷、血の匂い、夏の風、トマトとチーズの味、助手席のクッション、電話、笑み、紅い唇、笑み、笑み、笑み。

じわじわと脳をつごめく記憶達にため息をつくど、ゆっくりと麗子は眠りについた。隣で、ついなら起こしますよ、という、楽しそうな青年の声を聞きながら。

後篇

愛情と欲望が混じり合った暗闇にぎらつくネオンはただ自然を蹂躪する。人間の自己陶醉のために生み出された一夜限りの世界は空しくも激しい熱気に満ちている。噎せ返る匂いと甘だるい声の応酬、喚き散らす轟音に非日常が日常と化学反応を起こし、曖昧になった境界を何も知らぬ無垢な人間が行き来する。感情と本能に支配された都会の夜空の下で、女はただ愛されたいと思った。自分自身を愛で、人形のように可愛がられたいと、ただそう思っただけだった。そのためにはどんな苦勞も惜しまないと、魅力を余すことなく溢れされる女はどここの娼婦よりも色めいていた。目じりの先で笑い、唇だけで男を手にする女は、誰よりも人を愛していた。だからこそ愛されたかった。ただ、大切にされたかった。それだけだった。

自分の部屋に帰り、瞬間的にリビングの電気をつける。外の世界と違ってなんの色も見せぬ蛍光灯に女はただつまらないとつぶやいた。鞆を投げ出し、冷蔵庫のオレンジジュースを一気飲みする。テレビをつけてはすぐに消し、携帯のメールを確認するとさっさとバスルームに消える。すべての穢れを払い落しながら、女は夢想するのだ。真夜中の錆ついたショッキングピンクの電球のような、汚らしくて気味が悪いほどの恋愛がしたいと。むしゃぶりつかれるほどの愛を受け、肉汁を滴らせて果てたいと。一心に愛情を受けた瞬間に女は幸福になれるのだと女は知っていた。唇が語る軽々しい愛の言葉ではなく、心をそのまま投影したかのような愛撫を受けたとき、女のすべては内部から崩壊されるのだと。がらりがらりと崩れていく心の音を聞くと、すべてがどうでもよくなり、愛すべき対象にすべてを委ねてしまいたくなる。それがいかに危険なことか、女は知

っていた。了解したうえで、それでも彼女は求め続けたのだ。自分以外にも、愛情を欲している女がいるのだということを見ぬふりをしながら。

暗闇の中でぼんやりと光る電子的な明るさはやけに現実感を削いでいると藤谷未奈は思う。羅列された文字には何の感情もなく、そこにあるのはただ事実だけだというのにも関わらず、それでも携帯電話は非現実を運んでくる。誰もが自分を特別だと信じている世の中で、たったひとつの真実しか告げぬ携帯電話は時に巨大な誤解を招く。そこにあるのは事実だけだという錯覚に陥っているからこそその大きさに気づかずすべてを鵜呑みにする人間とはどうしてこうも愚かしいのかと、未奈は自分を呪った。証拠や確証などなくとも、わずかな可能性に賭けてみたとしても、結局その期間に堪えられなければそれは賭けた方の負けなのだ。未奈はそろそろ限界だと思った。真実がどこにあるのかわからずに模索するのは地獄もなく未開の地を裸で歩くのと同じだ。悲観に悲観を重ね、未奈はもつとも疑うべきでない人物を疑うことになる。所詮愛情など終わるためにあるのだらうと屈折した考えで徐々に人間不振になっていく彼女は、それでも愛した。恐怖の狭間でも、それでもどうしようもなく愛していたのだった。捩曲がった関係は誰かを想うたびにさらに絡まり、結局はのびきった糸はいずれぶつんと切れてしまう。そのことに気づかず、そして今日も未奈は糸を引っ張り続ける。

「嫌……」

思わず声が漏れる。藤谷未奈はマンションの郵便受けの前で立ち尽くしていた。開けた途端、あふれんばかりの真っ白な封筒が姿を表したのだ。二、三枚はその多さに耐え切れず床に落ちてしまった。

未奈は慌ててすべてを引っつかんで鞆に擦込むと、足早にエレベーターへと向かった。

自室について、封筒をすべてシュレッダーに嚙ませる。中身を見ようとはしなかった。もう、何が書かれているのか知っていたからだ。確認しても気が滅入るだけだと、未奈は歯を食いしばってシュレッダーに入れ続ける。このただけに、少々高いとは思いつつも先日電気店で購入したのだ。さすがと言うべきか、分厚い封筒ごと細かくしてくれるこの機械のおかげで、当初よりは楽になっていた。

数週間前まで、未奈は幸せの絶頂にいた。一条蓮という恋人は深く深く自分を愛してくれていたし、自分も彼を本当に大切にしていた。なにもかも上手く行っていた。歯車が狂いはじめたのは、社内である噂を耳にしてからだ。

—— ねえ知ってる？

—— えー何々？

—— 一条先輩って、高倉さんと婚約してるんだって！

—— うっそーわたしひそかに一条先輩狙ってたのになー

—— あっははむりむり！高倉さん美人だしスタイルいいし優しいしや、

—— 確かにねー高倉さんならしょうがないっていうか、お幸せに

って感じだよー

偶然聞いたそんな会話は、未奈の心をすんと落とすのに十分すぎるほどで。不思議だったのは、一条は常日頃未奈の側を離れず、高倉ほのかと浮気するほど暇ではないということだった。けれど、火のない所に煙は立たない。そう考えた未奈は、ただじっと、獲物を狩る獣のように息を殺して様子を伺っていた。高倉ほのかは、火を付けずに煙をたてようとしたのだということにも気づかず、未奈は疑心暗鬼にかられる。一度疑問を感じてしまうと、すべてがそこに繋がっているのではないかと疑いを深くするのが人間という生き物だ。こうして二人の間に来た溝は、高倉の思惑通りに広がっていく。

「…何、これ、」

未奈が一条と距離を置きはじめて数日後。彼女の身に異変がおきた。

自宅のマンションにつき、いつも通り郵便受けを開けると、そこに大量の白い封筒が入っていたのだ。宛名はすべて未奈。慌てずべてを引っつかみ自宅へ逃げるように戻ると、着替えもせずには大急ぎで封を切った。

そこには、ありとあらゆる愛の言葉が連ねてあった。

『未奈、信じてほしい、俺にはお前しかいないし、お前だけが俺の生きる糧なんだ。』

『未奈、どうか避けないでくれ、俺はお前がいなくて心が張り裂けそうだ。』

『未奈、愛してる。この前のデートでも話したけれど、噂なんて信じないでいいんだ。』

『未奈、電話で話したこと、覚えてるだろ？』

『未奈、未奈、』

『未奈、未奈、未奈、未奈、未奈未奈未奈未奈未奈未奈未奈』

未奈は、一条の手書きの文字を読んだことがなかった。

だからこそ、この筆跡が彼のものだという確証はなかった。それでも。

「嫌、嫌、何よ、何で、」

二人しか知り得ぬことを、どうやって他人が知れるというのか。

深い疑念は恐怖へと様変わりしてしまった。未奈はますます一条を避けた。怖かった。彼の深すぎる愛情が、重たく彼女の心にのしかかっていた。

手紙だけではなかった。無言の着信、多すぎるメール。ストーリーのように未奈の生活に纏わりつく一条の影に、すでに彼女の心はずたずただった。距離を置けば置くほど、彼女への執着が増すよう

に感じた。

そして、数週間経って。

彼女は、すべてから決別しようと決心する。

「もしもし？蓮？」

感情のない声で、未奈は囁くように電話越しの彼に話しかける。

「ええ、明日。そう、久しぶりに、貴方と話がしたくて。」

すべてを、終わらせるために。

そして、いつもの珈琲店で、未奈は一条蓮との関係を絶った。普通ならば、これでもう、彼とは関わらないのだと割り切り、自分の人生を再び歩き出すのだろう。けれど、彼女にはそれは許されなかった。

愛を欲して、望むような愛を受けて。それでもその重すぎる感情に耐えきれなくなった罪は重い。じくじくと後から痛む火傷のように、未奈の心は徐々に崩壊していく。厄介払いなど彼女には許されなかった。男を己の欲望のままに動かし、己の快楽を求めた浅ましい女に平穩など許されるべきではないのだ。人間という高等生物に

許された誤解という甘い嘘は罪を背負った哀れな女に見えるはずがない。すべてを計算した上で、さらに誤解を意図的に生み出そうとした幸福強奪者の存在など彼というあまりに大きな存在の影に隠れてしまうものだ。女は気付かない。自分の行動がいかに愚かしいことだったのか、いかに誰かを傷つけていたのか。自分本位の結果、彼女は激しい罰を受けることになる。それは、自分が傷つくよりも哀しすぎる結末。

しばらくは、何事もなく過ぎ去っていった。会社でも、お互い普通に接し続けていた。これで良かったのだと、用済みになったシュレッダーを撫でながら未奈は微笑んだのだ。何も気付かず、新たな幸せを見つけようとしたのだ。しかし。

未奈が別れを告げて2週間後。一条と高倉は、同時に退職した。やはり二人は付き合ってたのだと未奈が実感するより早く、二人は駆け落ちをしたのだろうという噂が社内を駆け巡った。不思議と、未奈はその事実を受け止めていた。縁がなかったのだと、深い愛情に蓋をして、嚴重に鍵をかけて脳にしまい込んだ。心のどこかで気づいていたのかもしれない。けれど彼女はいやだいやだと背を向ける。しかし。

『一条蓮は、高倉ほのかに脅されている。』

郵便受けを除いてすぐに未奈の心拍数を一気に上昇させたもの。二週間前にも現れた、真っ白な封筒だった。同じような白い封筒にどきりとしたものの、浅い呼吸を繰り返しながら女は急いで部屋に

戻る。一番はじめに封筒を回収したとき以上の緊張が彼女を襲った。怖かった。しかしこれが未奈を恐怖の淵と後悔の念から救うのだと気付いたのは、封を切ってでてきた簡潔なメッセージに未奈の中の鍵が疼いたときだった。手紙の主は、一条の古い友人だという水ノ江という者からだった。手紙には、未奈の手を貸してくれれば高倉を説得できるかもしれないから助けてほしいと書いてあり、二日後に迎えにいくと書かれていた。現在は一条を匿っており、高倉から逃げているのだという。未奈は、ぐしゃりと顔が歪むのを感じた。

――蓮、

自分は彼を疑った。彼の愛情に恐怖を抱いて、そして逃げてしまった。彼が苦しんでいたことに気づけず、自分勝手に行動してしまった。罪悪感と後悔が、未奈に疑うことを忘れさせていた。その手紙を信じた未奈は、ただ彼の無事を祈りながら、いつの間にか開いてしまった鍵を、深く深くしまい込んだ。彼への愛情を取り戻していた。しばらく見ていなかった彼の笑顔を思い出して、未奈は久しぶりに涙を流した。2日という時間は、未奈に愛情を思い出させるのに十分すぎるほどだった。彼女はもはや、恋に恋する少女と変わらなかった。真っ直ぐすぎる想いはどこか人間を麻痺させる麻薬を分泌する。全体を見渡すことをせず、ただ暗闇の中で赤く光る携帯電話に向かうように、障害物のことなど考えもせず、ただ女は真っ直ぐに己の道を信じて進んでしまう。

「藤谷未奈様、主がお待ちです。」

家の前に現れた笑顔の青年。未奈は躊躇わずに、その手をとった。

脳内を反響するぐらりぐらりという感情の渦に眩暈がした。この数週間を想って、女は密かにため息を零す。そして気付くのだ。ネオンばかりみて、何物にも気付くことができなかったのは自分自身なのだ。原石を探すことなく、すでに空気に毒されている宝石など比ではないほどの、どこまでも大きな生命体。

漆黒の舞台上でただ輝く星達は、信じられないほどの時間を彼らの運命とするのだ。偉大で途方もない存在を無視し続け、ぎらつく悪目立ちしている電飾などに美しさを感じるなど、生物として具の骨頂だと未奈は窓から流れる輝きにほくそ笑んだ。後悔などしていなかった。疑念を抱くことに恐怖していた。窓の外の世界を脳内で一掃しながら、女の瞳は輝きを取り戻していた。美しく気高い女は、男という栄養素がなくとも生きていけるのかもしれないと、青年は頭の中で反芻する。この世の幸福に気付かず本当の意味の自由を勝ち取るためにすべてを捨てた女と、すべてを守るために己の自由を与えた女は、どちらが幸せなのだろうか。

——ああ、だから、

何も知らず、ただ恐怖を貪り続ける少女は、悩むことなくただ幸せなのだ。男と女などというくだらない種族の争いに巻き込まれることなく、人間のもつ感情のみを愛する幼い少女は、どんな女よりも真っ直ぐに歪み、そして不幸なふりをして幸せなのだ。青年は助手席でただ遠くのネオンを睨み続ける女を横目で見ながら、くすりと笑みをこぼす。少女の元で己がいかに幸せだったかを実感すればいい。そうして愚かな人間は死の淵に立って初めて人生を憂うのだと青年は気付く。そしてそれこそが少女の狙いなのだといっそう笑みを深くしながら、極めて優しい声色で彼は告げるのだ。

——もうすぐ着きますよ、

と。幾分かすっきりとして、目を輝かせてわかりました、という女に、青年は女の強い自身と意地を感じる。

「私が蓮を救います。」

女は、そして漸く女に成った。じわりと滲む薄汚い夜の人工色に心からの笑みを投げつけると、赤い唇が奇妙に歪む。それは、幸福に満ちた、自己嫌悪と自己犠牲と自己陶醉を超えた最大級の笑顔だった。

＊

目の前を通り過ぎる数多くの足たちに嫉妬した。かつかつと音をたてて過ぎ去るカラフルな物体は一定のリズムをもって人体を目的地に運んで行く。脳は動けと命じ、従順にそれにしたがって音程を生み出すことこそ、足が意思を持っていない証拠に他ならないと茜は思う。何故そうも真っ直ぐなのだ。何故歪まないのだ。お前は人体の一部であり、私の一部であるはずなのに。どうして、私のように歪むことなく突き進むのだ。己の足首をぶらりぶらりと揺らし、ヒールの先がテーブルの金属部分にぶつかってかつんと音を産んだ。一瞬顔を顰めると、再び窓の外をじっと観察する。視線を反らすことなくただまっすぐに前を向いて闊歩する女性のヒールの下でひびく大地の悲鳴を聞いて、少女は静かに目を閉じた。

人生には幸福と不幸が平等に訪れるのだと言ったのは誰だったか。そもそも幸福とは一体なんなのだ。結局幸せそうに見える人だって実際は不幸かもしれないし、そんなことは本人の主観次第であって、主観とは空模様のようにころころと変わってしまう。他人が勝手に自分の定規で物事を判別したところで無意味なのだ。雲一つない快晴を愛する人もいれば曇り空を愛する人もいる。そんなことは非常に些細な問題であって、今日の天気の善し悪しなんて人生に深く関わることはない。己の身の上を他人に同情されようとも、同情される由縁が天泉茜には理解できなかった。幼い頃に両親をなくし、兄によって祖母に預けられたのだと聞いたものの、祖母と血縁的な繋がりはないであろうことにはとくに気づいていた。別に他人を羨

ましいと思ったことはなかったし、別段不幸だと思うこともなかった。けれど。

「茜、どうしたの。」

感情の薄い、か細い声に茜は我に返った。心配そうにこちらを見つめる姉の蒼に向かって笑顔で大丈夫と言った、蒼は悲しそうに俯いた。

天泉蒼はただ静かにアイスコーヒーを飲み干す。土曜日の昼すぎ、喫茶店内は人でざわざわとした音を作り上げており、その中でもじつと互いの飲み物を消費することだけを続ける彼女たちはそれでも異質ではなかった。ここでは他人は他人に興味を持たない。彼女たちがただ黙りこくっていたとしても、それは社会に大きく影響することなど絶対になく、そしてそのことを知っているからこそ他の者の興味をひくことなどあり得ない。所詮人というのはどこまでも自分本位なのだ。蒼は実感する。私たちはお互いを捕食し合わなければ生きていくことなどできないのに、他人は一人で生きていくことができるのにも関わらず他者と関わろうとする。実に無駄なことだと少女は浅いため息をついた。

彼女達は、ただの姉妹ではなかった。双子であり、それもただの双子ではなかった。

「お姉ちゃん、私は幸せだよ？」

「そう…よかった。」

茜は自分が嫌いだった。なぜか幼いころから、自分と関わった者はすべて不幸になり、反対に自分は必ず幸せになれた。隣の子が新品の鉛筆を自慢した次の日、彼女はそれを失くしたと泣き、なぐさめる自分の筆箱の鉛筆が新しくなっていた。親友が男の子とデートした次の日、彼女はその子に振られ、彼は自分に告白してきた。成績が上がったとよろこんだ同じ塾の男の子は、次の日交通事故で右手を骨折し、代わりに自分の成績が驚くほど伸びた。けれどそれらの幸せも続く事なく、そんな自分の体質に嫌気がさしては不幸になった。しかし、その不幸も長くは続かない。それは、自分と反対の姉がいたからだ。姉の蒼は、自分が嫌いではなかった。なぜか幼いころから、自分と関わった者はすべて幸福になり、反対に自分は不幸になった。新品の鉛筆を失くした隣のクラスの子は、次の日筆箱を新しくして、代わりに自分の筆箱は切り刻まれていた。妹の親友が男の子に振られた次の日、彼女は部活の先輩からデートに誘われ、その人が好きで遊びに行く約束をしていた自分は代わりにすっぱかされた。同じ塾の男の子が骨折をした次の日、彼は病院で音信不通になつていた昔の彼女に会えたが、代わりに自分は彼女という親友を失った。けれどその不幸は長く続くことなく、他者の不幸を救えた満足感で幸せになった。しかし今度は妹によって、すぐに不幸になる。

茜は他者の幸福を、蒼は他者の不幸を己のものに還元してしまう体質だったのだ。原因などわからない。ただ、普通の人以上に感情に敏感で、わずかな心の変化をすぐに察知し、どうしようもない運命にながされてしまう。けれど、常に幸福と不幸が目まぐるしく変わる彼女達は、お互いにどうしたらいいのかわからなかった。

外に出ることがつらかった。外の世界は感情で溢れ、彼女たちを

一瞬のうちに幸福と不幸の渦に巻き込んでしまう。けれどそうしながらも、すでにその洪水に慣れてしまった彼女たちは、並大抵の幸福、不幸では一喜一憂しなくなっていた。哀れな少女たちは、大人になっていくのだ。

「お姉ちゃん、わたしね、好きな人ができたの。」

窓から視線を戻し、アイスコーヒーを一口飲んでから、少女は表情を変えずにそう囁く。

茜の言葉に、蒼はぞくりと背筋が寒くなった。茜の不幸を感じる。彼女は今悩み、苦しんでいる。彼女の苦しみが手にとるようにわかる。体内にながれこんでくる。溢れそうになる想いが空回りして、そして己の体質に悲観する彼女の脳が駄目だと危険信号をならしているのがわかる。血液は急激に冷えて行き、茜が感情を消そうとしていることに蒼は気付く。

「でもね、わたしはきつとまた、その人を不幸にしてしまう気がするの。」

妹は不安で満ちている。また自分が彼の幸福を吸い取ってしまうのだと危惧している。ああ、可哀相な茜。わたしがその苦しみを受け入れてあげられたら。そしたら貴女は楽になるのでしょうか。

「そしたらまた、わたしが貴女の代わりになってあげる。」

蒼は優しく笑った。からん、と。彼女のグラスの中で、氷が落ちる。

茜はどくと心臓が高鳴るのを感じる。蒼の幸福を感じた。彼女は今、自己犠牲の上に出来上がる天泉茜の幸福に喜んでいる。自分の犠牲によって妹である自分が幸福になることにとてつもない喜びを感じている。彼女の幸福が手にとるようにわかる。血液が沸騰しそうに熱い。胸の奥が痛みと喜びにぎりぎりと言を立っているのを感じる。血行がよくなった彼女の頬は薔薇色だ。そうして姉はここまでも不幸に見える。

「わたしたち、見た目はそっくりなのだもの。わたしがあなたの代わりに、彼の不幸を吸い取ってあげる。そうしたらまた元通りよ。」

姉の弱々しい笑顔！なんて素敵な自己陶醉。わたしにもその甘い満足感を分けてくれたらいいのに。そうしたら、わたしは幸せになれるのでしょうか。

「大丈夫よお姉ちゃん、きっとそうになったら、すぐに新しい人を見つけるもの。」

妹の嫉妬心がわかる。

姉の美しい感傷がわかる。

妹の不満足がわかる。

姉のはかない硝子のように繊細な心がわかる。

そうして、たった数分間の間に、目まぐるしく出し入れされる感情の波に、二人はすっかり疲れ果てるのだ。

わたしは怖いのです。

自分が満たされた瞬間に、すべての者の恨めしい視線が、弱々しい姉の笑みが。自分がひどく傲慢になった気がして、絶望しそうになるのです。そうなるたびに姉の元へ走って、幸福のかけらを奪い取るのがもはや本能となつてしまいました。わたしは幸福欲で満ちています。食欲よりも睡眠欲よりも性欲よりも。もっと多くの幸福を貪ることが、わたしの生きる道なのだと知ってしまったから、わたしはますます貪欲になりました。そのたびに自分が嫌いになるのです。無限に続くループから抜け出すには、どうしたらいいのでしょうか。

わたしは怖いのです。

自分が不幸のどん底にいるときの嘲笑うかのような他者の幸福に満ちた視線が。優越感や満足感に満ちた表情が、わたしをも侵食するのではないかと怖くなるのです。わたしは幸福になつてはいけません。わたしが幸福になれば妹がそれを感じて幸福になります。結果として不幸になったわたしを見て、自己犠牲の上に成り立つ幸福だと知った妹は不幸になり、今度はわたしがその不幸を拭いさるうとする。その繰り返しなのです。妹が永遠に幸福に、わたしが永遠に不幸でありつづけることこそ、このバランスを保つ唯一の道なのだと思います。

「「ねえ、」」

二人で同時に顔を上げた。曖昧に微笑んで、交互に考えを述べる。声色に感情を混ぜないように、相手に感情が流れ出さぬように、ただ淡々と語る。

「やっぱり方法は一つしかないわ。」

蒼が視線を飲み残したアイスコーヒーに移す。

「おばあちゃんには悪いけど」

茜は頬杖をついてくるとストローを回す。

「これが自然の道だと思うのよね。」

蒼はぼんやりと妹を見た。

「そろそろ完全になるべきだわ。」

力強く笑った一人の少女がそこにいた。

永遠に続く螺旋階段から抜け出すには、新たな因子が必要なのだと二人は思う。

その存在が二人の中和剤となって、そしてバランスが生まれるのだと二人は信じる。

「お兄ちゃんに会いたい。」

幼い頃自分達を祖母に預けたという兄。彼こそが二人のバランスを作ってくれるだろうと、二人は夢想する。ひどく子供じみた、幼い発想だった。くだらないと一掃することができないのは、成長して、二人が限界を感じてしまったからだ。

茜は他者を不幸にしすぎた。

蒼は自分を不幸にしすぎた。

極端な二人は、感情のコントロールが出来ずに苦しみ続ける。助けを求めたくともできない、そんな細い線の上を綱渡りすることに、二人そろって疲れてしまっていた。街に出れば必ず姉は周囲の不幸で体調を崩し、妹の通り過ぎた後は暗い表情の一般人であふれかえる。二人には、もうコントロールしきれなかった。

そして、こんな双子の様子に気づき、彼女達を救う救世主が現れる。

「引っ越し？」

「そうよ。」

「…急だね。」

夕食時。祖母から、引っ越しの話が提案された。祖母はどこか迷いながらも、ゆっくりと神妙な顔でその事実を告げた。

「いい、落ち着いて、よく聞くんですよ。」

すっかりとした瞳で、麗子は双子を見つめる。麗子はここ数日悩み、迷っていた。けれど同時に、双子に限界が来ていることにも気づいていたのだった。

「貴女達のお兄さんが、一緒に住むことを提案しに来ました。」

最後まで、麗子が危惧していたこと。彼女達に、少女と接触させてはならないと思った。少女に出会ってしまったら、元通りの生活が望めないことを知っていた。けれど。双子の体質に気付いていたからこそ、これ以上他人を不幸にするわけにも、蒼を不幸にするわけにもいかないと思った。だからせめて自分がこの世をさる瞬間までは、少女の毒に当てられないように気をつければよいと自分を納得させ、そして麗子は共に生活することを決意する。

「お兄ちゃん、が、」

双子は顔を見合わせた。自分達の負の連鎖が断ち切られる時が来たのかもしれないという希望と、記憶におぼろげなほど会っていない兄に会うことへの不安。それらが交差して双子の脳をぐちゃぐちゃとかき回す。そして何より、双子は祖母が大好きだった。まった

くの他人であつたはずなのに、こうして愛情深く自分達を育ててくれた。感謝してもしつくせないほどだと思つていたからこそ、双子は麗子の幸福を望む。

「でも、でもおばあちゃんはどつするの…?」

優しい孫娘達に、麗子は優しく微笑んだ。

「私も一緒に、と。おっしやってくれました。」

途端、ふたりはぱあつと明るくなった。しかし、その蒼の笑顔は当然のように一瞬で引つ込んだわけだが。

「一週間後、迎えがきます。荷物は後日で大丈夫だから、ゆっくりと心の準備をしてくださいね。」

麗子は笑う。漸く訪れる平穩に、穩やかに、穩やかに微笑んだ。

「茜…?どこにいくの?」

日曜日。茜ははじめて、休日一人で家を出ようとしていた。珍しく花柄のワンピースをひらりと揺らめかせ、唇に乗ったグロスが太陽光にきらりと輝く。どこまでも可憐で、美しかった。

「お姉ちゃん、ごめん。わたしね、やっぱり最後だから、」

そして、蒼はゆるゆると茜の感情を読み取った。

「高倉君に会うのね。」

一瞬、優しく笑った姉に、茜は満面の笑みを見せた。

「高倉君を不幸にしてしまうかもしれないけど、でもきつと、お兄ちゃんに会えたら元通りになれる気がするの。」

「…そうかもしれないわ。楽しんできて。」

そつと手をふる姉に、茜は胸の中で謝りながら、笑顔で手をふりかえた。蒼が恋愛などできないことを知っていた。彼女は一方的に想いを抱いていたとしても、決して結ばれることを望まなかった。それが彼女の優しさなのだと知っていた。そして、自分が高倉涼を好んでいるように、蒼いも、彼を大切に思っているのだと知っていた。だからこそ、茜は決着をつけようと思った。自分が姉に遠慮することほど蒼を不幸にすることはないと知っていた。彼女をこれ以上追い込んではいけないと思った。

待ち合わせの駅に向かって、茜は駆け出す。ただただ、涼の幸福と、姉の平穏を願いながら。

*

無邪気な好奇心は罪になるのだと知った。ただ純粹なまでに真っ直ぐな思いは相手に伝わることなくじくじくと心の中で成長し続ける。いつの日か思いだけがすべてを内包するほどに大きくなると、そうして人は人でなくなる。ゆつくりと流れていく時間の中で、ただ真っ直ぐに生きることを誓った青年は静かに窓の外を眺めた。徐々に青く青く染まりゆく空に遠くできらきらと輝く太陽の残骸がひどく滑稽にみえた。世界は空に抗えない。青く黒くなる空に抵抗しようとして夜空をネオンで満たしたところで、昼間の太陽ほどの温かさもなければ優しさもない。そこにあるのはいやらしく纏わり付く淫猥で卑劣な欲望だけだ。恐れている癖に恐れを知らぬふりをする愚かな人間の象徴だと青年は嗤う。本当に恐れを知らぬのは彼女だけだ。本当に歪んでいるのは彼女だけなのだ。世界が侵食する空に勝てぬように、誰も彼女に勝てるはずがない。彼女は青年のすべてであり、青年こそが境界線だった。空と世界の曖昧な境界線のようにゆらゆらとあの世とこの世を行き来する青年は、しかし幸福だった。

—— 漸く、彼女は解放される。

彼女を縛り付けている知識欲から、漸く解き放たれるのだ。青年はにっこりと微笑んだ。

薄暗い厨房では絶えず甘い匂いがしていた。フルーツタルト・チーズケーキ・フロマージュブラン・桃のコンポート・クレープシュゼット・アイスボックスクッキー・アップルパイ・パウンドケーキ・マドレーヌ・マフィン・レモンのロールケーキ・苺のシフォンケー

キ・ティラミス・ガトーショコラ・ポルボローネ・シュークリーム・パンプキンパイ。それらをすべて、真つ白な皿に盛り付け、庭の薔薇で飾りつける。噫せ返るほどの甘さに、青年は唇を歪めて笑う。

——そして、傷ついた彼女を救うのは俺だ。

彼女を救えないこと、彼女がいない世界ことが青年にとっての恐怖だった。その世界があの世界でもこの世でも、境界線である彼が彼女と反対の岸にたどり着くなどあつてはならなかった。だからこそ、彼は命懸けで準備をしてきた。少女の幸福のため、少女の平穩のため、少女の絶望のため、少女の恐怖のために。

青年は、ゆつくりと幕を開ける。

すっかり暗くなった夜空を、恍惚とした表情で見上げる。

青年が少年だった頃。妹たちを言われたとおりの女性に預け、そして彼はこの屋敷にやってきた。水ノ江右近と名乗る恰幅のいい男の下で、彼は様々なことを学ぶ。まだたった5歳だった少年は、驚くほどの知識を身に付けた。男が命じたことは、屋敷内の本をすべて読むこと。何年かかってもいい、ただ、その本をすべて読み、すべて理解するように。そして少年は読書に明け暮れながら、妹たちと同じくらいの歳の少女と共にここで成長していった。

「響夜、」

或る時、少年は右近に呼ばれる。少年が十五歳のときだった。右近は病に犯されていた。妻は数年前に他界していた彼は、果てしない孤独の中にいた。数多い使用人はほとんど辞めさせ、彼の側近である老人だけが残っていた。

「およびでしょうか、旦那さま。」

人形のように真っ白な肌をして、黒々とした瞳を煌めかせている少年は美しく成長していた。右近は眼を細めて笑う。

「お前、どこまで読み終わっただ、」

「第一書庫のものはすべて読み終わりました。現在第二書庫のものを読んでいます。」

無機質でひやりとした声色に、右近は満足そうにベッドの上で頷いた。ぎしぎしと音を立てて上半身を起こすと、大きく皺のある手で少年の髪を撫でる。さらさらと指を流れる黒髪は、右近の娘とよく似ていた。

「お前はそうやって、ここにあるすべての知識を吸収しなさい。そうして、瑠音にそれを教えてやるんだ。私の代わりにね。」

それが、娘をこの世に残す父親の最後の願い。孤独な少年にそれを託したのは、彼の瞳が娘のそれと似ていたからという理由だけではない。

「お前は一人ぼっちの怖さを知っているね。それはいくら本を読ん

だところで学べることではないんだよ。それを知っているからこそ、あの子の孤独に気付いてあげられるだろう。」

ただ黙って彼の話を聞いている少年は、脳裏に二人のそっくりな赤ん坊が浮かび上がるのを感じる。二人残してきた、可哀想な妹たち。彼女たちも孤独だが、それでも双子は互いに捕食し合えるであろうことを彼は知っていた。

——溜音おじょうさまは、ちがう。

たった一人の肉親にも、もう少しで永遠の別れを告げなければならぬ。彼女は孤独で、でもそれがいかに哀しいかに気付くほど成長していない。それがとてつもなく寂しいことだと彼は知っていた。もし、そのことに気づいてしまえば、彼女が壊れてしまうであろうことも。

——おじょうさま、

少年は、幼すぎた。自分にとっての肉親よりも、孤独な少女を選んだ少年は、彼女のために生きようと決めた。彼女が望むように、寂しくないように、一人の夜が怖くないように。

「天泉！ねえ、これ見て！」

少女はそして、歪んでいく。

「本で書いてあったのだけど、でもおかしいのよ、ぜんぜん怖くな

いの。」

成長した少女の足元に転がる、丸い物体。

「とりあえず近くにいた人間がこの人だったのだけど、でも全然怖くないの。どうしてかしら？」

それは、真っ赤に濡れた、老人の首。

「ほらみて、この小説には、『人間の首が切断されて転がっているひどく恐ろしくおぞましい情景に少女は身震いし恐怖した。』って書いてあるのよ。私も少女みたいに恐怖を感じたかったのに、でも、

」

——全然怖くなかったのよ。

そう言って、一筋の涙を流して笑う彼女の指は赤く赤く濡れ、ごろりと転がったかつて彼女の父の側近だった男は無情にも物体と化した。

少女が恐怖にこたわったのには理由があった。ただの好奇心ではなく、彼女の父親に原因があったのだ。

『お前は、孤独になる恐怖に耐えねばならない。その恐怖を忘れる

な、そして、お前のせいで誰かを孤独にすることだけは絶対にしてはならない。」

父親から娘への最後の言葉は、何もわからぬ少女には歪んで届いてしまった。

父親が亡くなり、葬儀の最中。真っ黒なドレスを着た幼い少女は、隣に並ぶ少年にぼつりとこう呟いたのだ。

——ねえ、わたしって孤独なの？

少年は迷う。迷って迷って、悩んだすえの答え。

——お嬢様には、俺がいますから孤独ではありません。

真っ黒な瞳に感情を宿さず、少女はゆるゆると視線を動かす。

——それじゃあ、恐怖になることはできないわね。

少女は怖さを知らなかった。命を奪うことの怖さも、罪悪感に囚われることも、未知の存在に出会うことも、背徳の海に溺れることも。そしてそれから、少女は恐怖を体験したいと強く願うようになる。

「お嬢様、大丈夫ですよ。」

真っ赤に濡れた指先を握り締め、しっかりと少女を胸に抱いた少年は。そして、彼女を守ろうと誓った。少女の心が安定するように幸せになれるようにと。甘い夢を見続けることこそが恐怖だと気づくことなく。まるでハロウィンのお化けのように滑稽で寂しくて、そしてどこか恐ろしい。自分達の恐ろしさに気付かず、ただ二人きりの世界で砂糖を溶かしたような幻惑の中で生きることを選んだ。血濡れの部屋で晚餐会を開いて。骨の軋むフロアでダンスをして、断末魔を聞きながら読書をして、臓物に汚れたテーブルで朝食をとった。それが普通だった。恐怖を感じることなく、それが普通になつてしまった。外の世界を見せぬようにと、ずっと少女を室内に留まらせたせいか、少女の肌は恐ろしく白く、死人のようだった。その陶器の肌に生える真っ赤な唇は蠢く舌先に彩られて、残酷に笑いながら紅茶を飲み干す。数々の死体たちによって作られた廊下のオブリエ。不気味に輝く魔方陣。十字架に死ぬ聖者のように杭を打ち付けられた少年、剥製にされた少女、手足を？がれた老女、ホルマリンにつけられた青年の標本、内臓に宝石を詰めた老女、そして、首のない老人。それらに囲まれ、そして青年は気付いた。

これが、少女の恐怖を遠ざけているのだと。

少女の周りに住む異質は、少女を孤独にしていなかった。それこそが恐怖になれぬ原因。永遠に続く収集は、永遠に少女に答えを与えない。けれど。

——恐怖こそが、彼女の願い。ならば、

そして、青年は決意する。彼女の願いを叶えることこそが自分の使命なのだ。右近のことを無視する形にはなるけれど、青年は、少女の言葉の方こそを重く受け止めていた。それから、二人はともに歪んでいく。

漆黒の空がさらにその深さを増し、そしてやがて白み始めると太陽が顔を出す。青年は静かに色とりどりのスイーツ達を巨大な冷蔵庫に仕舞うと、眩しそうに太陽のかけらを見つめた。どこからともなく流れたす音に、朝が来たのだと実感する。輝きだす世界を睨みつけ、青年は夢想する。二人だけの、甘く苦い世界を。

——これで、終わりにしましょう。

静かに祈る。願わくば、少女が救われますようにと。そして、少女と永遠の時を過ごせるようにと。青年はそして、ゆっくりと瞳を閉じた。

「皆様、晚餐によろこそ！」

煌びやかなドレスに包まれ、少女はにっこりと笑った。隣にはタキシードの青年。そして、目の前のテーブルセットに座るのは、六人の男女。全員目隠しをされ、静かに席に着いていた。上座に位置する少女の右隣に空席、その隣に制服姿の青年、さらにその隣にはスーツを着た女性。少女の正面には着物の老女、左の奥から赤いワンピースを着た少女、その隣には青いワンピースを着た少女、そしてその隣、瑠音の左隣りには草臥れたシャツを着た青年。誰も何も言わない。ただ彼らは、主とは誰なのか、そして鼻孔をくすぐる甘い匂いは何なのかを疑問にもつことしかできなかった。

「晚餐の前に、美しくも儚い夢物語を聞かせてあげましょう。静かに聞いていてくださいね。」

少女は静かに部屋をでた。途端、部屋の隅から巨大なスピーカーが現れる。少女の代わりにその席に天泉が座ると、スピーカーの奥から、少女の声がした。

『むかしむかしあるところに。』

静かに、天泉響夜はため息をつく。

『哀れな青年がいました。』

ごくりと誰かが喉を鳴らす。

『青年は一人の女性を愛していました。』

がたりと、一条蓮が椅子を揺らす。

『けれど、青年を愛する人もいたのです。』

ゆるゆると、藤谷未奈は瞳の奥で夢想する。

『けれどその者は、青年を愛するよりも彼女の弟を愛していました。』

ぎゅっと、高倉涼が拳を堅くした。

『彼女は弟のために、青年と結婚しようとしたのです。』

ゆらぐ空気に、天泉響夜が顔を歪める。

『そのおかしな愛情に、青年は辟易していました。』

一条蓮は指先が震えるのを感じる。

『と同時に、彼女の狂った嫌がらせに女性は辟易していました。』

藤谷未奈はじくじくと胸の底が蠢くのを感じる。

『青年は女性のため、哀れな女を死に至らしめようとしたのです。』

高倉涼は、涙を耐える。

『そんな女の弟は、一人で死のうとしました。』

はっとしたように、天泉茜は首を上げる。

『彼がそう思ってしまったのには、もうひとつわけがありました。』

いやだいやだと首をふりながら、天泉蒼は逃げ出すように椅子を引く。

『彼のことを、その時愛する少女がいたからです。』

とうとう来てしまったとでも言うかのように、穂波麗子は肩を揺らす。

『少女は他者の幸福を奪い取ってしまう体質でした。』

途端、高倉涼の脳裏に少女の姿がよぎる。

『そして、そんな少女は双子の姉のために、自分は奪い取れないほど幸せになろうとしました。』

ぐるりと見えないはずの視界を動かし、天泉蒼は妹を見る。

『姉は、不幸を吸い取ってしまう体質でした。』

小さくうつむき、天泉茜はため息をつく。

『そんな二人に、決定打を下したのは彼女たちの育ての親でした。』

穂波麗子は、見えないはずの四つの瞳が自分を探したのを感じる。

『彼女たちに、もう終わりにしようと、この世界に別れをつけようと提案した老女は、双子を彼らの兄に会わせようと思いました。』

表情のない瞳の奥で、天泉響夜はゆらりと二人の赤ん坊が揺らめくを感じる。

『そんな兄は、この物語を構築するため、すべてを背負い込んだ哀れな青年なのです。』

全員の息が、止まった気がした。

『さあ皆さん目隠しを解いて！天泉、あれをすぐに！』

すべてが、一瞬だった。

全員の鼓動がすべて鼓膜に流れるのをスピーカー越しに少女は感じる。

絡まる指先が目隠しを解く。天泉は言われたとおり、空席の前に静かに銀の大皿を置く。

「っ……………!!」

叫び声などない。ただ、絶句していた。

一条蓮は、銀の大皿の上に乗った高倉ほのかの首に恐怖した。

藤谷未奈は、目が血走って血のついたシャツを着た一条蓮に恐怖した。

高倉涼は、そんな二人と姉の代わり果てた姿に恐怖した。

天泉茜は、白手袋で顔を歪める天泉響夜と女の首に恐怖した。

天泉蒼は、すべての不幸が全身に流れ込んでくることに恐怖した。

穂波麗子は、すべてを悟って恐怖した。

『それでは皆様、永久にお別れと致しましょう。天泉、さようなら。』

そして、天泉響夜は。

一瞬後に、恐怖した。

「見つけた。」

巨大な塊を前にして、水ノ江瑠音はぼつりと呟いた。きらきらと歪に輝く物体は、美しいまでに瑞々しい生を感じさせる。そこにあるのは、色とりどりのティーセットを前にして、それぞれ絶望の混じった恐怖の表情で固まる人間たち。そこにあるのは、ただただ恐怖だけ。少女は、一瞬の輝き、恐怖の絶頂を、永遠のものにしてしまった。

「貴方達はその素晴らしい姿を保ったまま私に冷凍保存されたの。貴方達の最高の恐怖を、私が永遠にしてあげたのよ。」

巨大な部屋を冷凍するにはあまりに膨大な技術が必要とした。それすらをもやってのけてしまったのは、父親の財力と、天泉の知恵。

ピアノの前奏が高音を激しく奏で、ヴァイオリンが重なるとコントラバスが暴走しフルートが叫びだす。少女の脳内に響き渡る轟音は重なり、重なり、高音と低音が混ざり合うことなく自己主張を繰り返す。眩暈がするような脳内の叫びに、少女はじっと耐えていた。笑いながら、涙を流しながら、気丈にそこにただ立っていた。可笑しくてたまらなかった。自分自身が、この世界そのものが。

「ねえ、わたし、ようやく気づいたの。ようやく見つけたのよ。」

星空しか映っていないその虚ろな瞳で、少女は遠くを見るかのようにつつとりと微笑む。

ここには少女しかない。誰もいない、何もない。あるのはただ、大きすぎる世界と、たった一人でそこに立ちすくむ自分の姿のみ。

「これが、恐怖。」

くるりくるりと回りながら、ただ少女はその場に立ち続ける。大きく広げた両腕はそれでも世界を知るにはあまりに小さすぎた。ひらりと舞い上がるスカートの裾が風を産み、少女の涙を乾かす。

「わかったの、気づいたの、だからほら、早く、」

そして、少女は天泉の願ったように、最高の恐怖を実感した。

永遠の、孤独。

父親が最後まで危惧した、世界で最も寂しい、恐怖。

途端、少女の顔が歪んだ。抑えきれぬ感情をすべて吐き出すかのように、そして少女は。その場に膝をつく。

「ああああああああああああ……！！」

叫び声は何物にも反響することなく、大地に吸い込まれていった。誰も返事をしない、たったひとりの愛した男ももう、歪んだ笑顔を見せてはくれない。その事実気付き、少女はただきらきらと輝く物体になった響夜を見上げた。最後の少女の言葉に、彼は永遠の苦しみを知ってしまった。彼は、少女の永遠になることを望みながらも、少女と違う世界に留まることを望まなかった。最後の挨拶は、青年にとって、恐怖の幕開けにすぎなかった。できることならば、できることならば、

——俺は愛してますよ。

最後まで、愛の言葉が、欲しかったと。一瞬のうちにそう思っ
て、青年は気付いたのだ。少女をこちらに引き込むための最後の手
段を。それは、あまりに寂しく、どうしようもなく甘い願い。

「天泉……！」

六人が恐怖に顔を歪めている中で。

ただ一人、天泉響夜だけは、

困ったように、寂しそうに。

ただ優しく、笑っていた。

ざわり。木々が騒めくと。それを合図にしたかのように、世界に音が戻っていく。

虫は鳴き始め、風が芝生を揺らし、ようやく世界は正常を取り戻した。そして。

「……たすけて。」

少女は、壊れた。

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1275p/>

氷の願望

2010年11月27日21時46分発行